

やまざき文化

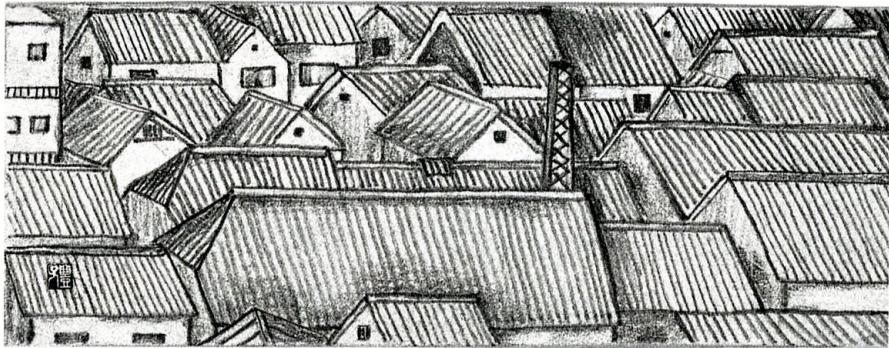
'94-2 *No.13



山崎町文化協会

"やまさき文化" 第十三号発刊に当たつて

山崎町文化協会会長 壱 阪 壽



今、吾々の周辺には、色々なことで大きな変化が起っています。戦後半世紀近く続いてきた体制が、政治も経済もそして文化も、何かを求めて大きく動いているようです。

私等の地域社会に於ても勿論例外ではなく、さまざまな変化が起こっています。今迄吾々が政治とか、経済に求めていたものだけではなく、もっと人間的なものであるとか、文化的に高いものとかを強く望むようになってまいりました。そういったことから今各地で大変文化活動が活発になつてまいりました。

山崎町でも協会加入の各文化団体は二〇団体と、とても多くそれぞれの分野で、大変な活動をされているのであります。そして、この"やまさき文化"はそれぞれの分野での活動状況を発表していくたく場所であると同時に、それを読んでいただく町民の皆様にそういった文化活動を御理解いただく場所でもあります。

又一方、此の小冊誌は、自分の創作された色々の作品を発表される場所でもあります。そういった意味を持つ"やまさき文化"ですから広く町民の皆様の御愛読を切にお願いするところであります。

尚最後になりましたが、此の号を編集されるに当たりましても、編集委員の皆様には大変御苦労いたきましたことに對し厚くお礼申し上げますと共に、此の小冊子が更に号を重ねていきますことを心より念願いたします。

◇ 目 次 ◇

2

やまさき文化第十三号発刊に当たつて

一 芸

三十八年ぶりの政権交代

壱 阪 壽

あるパーティーの席で

上山 安敏

光

短歌

稲村 幸子

沙鷗

俳句

和田 疎人

2

北欧の旅に思う

藤井 慧秉

11

毛沢東の重陽の詩

小川 登

12

スクイム市「寸景」

長川 耕一

13

水墨画に寄せて

横江 敏夫

14

センリョウとマンリョウ

井口 武一

15

薪能奉納を終えて

石野 敏郎

16

結成十五年をふりかえって

大谷 つるゑ

17

三ツ山大祭に出演

大谷 司郎

18

東洋蘭に思うこと

長田 一三

19

人間の人格構造

村上 嘉宏

20

史跡鹿沢城本丸跡の石碑について

岸本 正理

21

山崎町茶道研修会で学んだこと

井口 定子

22

舞踊の稽古に寄せて

石丸 和子

23

平成会結成5周年を迎えて

岸本 正理

24

尾崎町茶道研修会で学んだこと

藤村 清一

25

石野 哲男

森林滋治郎

26

森林滋治郎

善勝

27

井口 哲男

正理

28

和子

29

嘉宏

30

和子

31

嘉宏

32

和子

33

和子

34

和子

35

和子

36

和子

37

和子

38

和子

39

和子

40

和子

41

和子

42

和子

43

和子

44

和子

45

和子

46

和子

47

25 24 23 22 21 20 19 18 17 15 13 12 11 3 2

一 芸

山崎文学会 林 沙 鳴

室町幕府末期、その四職の一人、一色義定の旧臣で比類なき鉄砲の名手といわれた稻富裕直（後、「一夢と号す」）の話である。旧臣といったのは、一色家の滅亡によって、細川家に仕える様になつたからである。

その経緯は、次の様である。

室町幕府最後の将軍義昭の時、管領職であった細川藤孝（幽斎）が、無能な義昭を見限つて、信長に傾くのに反し、裕直の仕える丹後の領主、一色義定は、尚、義昭を援げようとしたため信長は、細川藤孝、忠興父子に命じて、義定を攻めさせた。そのため一色側では、重臣の離反、落城が続き、最後に裕直の據る弓木城だけが容易に落ちなかつた。そこで攻めあぐんだ藤孝は、明智光秀の斡旋で、娘を義定に嫁することによつて、和睦の道を選んだ。しかし、それも暫くの間で、再び、義定に離反の兆あつた。見た忠興は、義定を館に招いて、誘殺した。その結果、一色家の家臣の多くは細川家に召し抱えられることになったのである。こうして、名門一色家は亡んだ。

その頃、既に、鉄砲の名手としてばかりでなく砲術全般の知識に詳しかつた裕直は、藤孝の強い要望で、上士として、召し抱えられることになった。本能寺の変、前年のことである。

正室は、光秀の娘で、名は、玉子といい後、洗礼を受けて、ガラシャ婦人と称されたことは有名である。聰明で、類い稀な美貌の持ち主であったと、いわれるだけに忠興の愛し方も一方でなく、嫉妬も、又、異常なものがあつた。

ある時、瓦職人が、玉子の姿を覗き見したといって、その首を落とし、それを玉子の食膳に供したり、玉子が屋敷内に於いて、家臣の前に現れることさえ許さなかつた。

忠興が、信長の落し子ではないかと噂されたのも頷ける話で、家臣達は、恐れ戦いた。

そうした性情のせいか、名門の嫡子といながら、戦国武将のご多分にもれず、武芸には堪能で、特に鉄砲をよくし、家中随一といわれる程の自信家でもつた。

好んで、良く狩りに出たが、そうした時は、裕直らを伴つた。狩りが終わつて、いつも話題になるのは、獲物の数であつた。多くの場合、忠興の獲物が一番多かつた。

そうしておけば無難であるということもあつたが、確かに、忠興の腕も、それだけの実力があつた。しかし、裕直の獲物の弾の跡は、總て、獲物の急所を貫いていた。忠興が、いつも、悔しがることであつた。

師匠、橋本一一把とか、紀州雑賀衆の鈴木孫一といった数々の名手が現われたが、彼等は皆、的を撃つことだけに専念したが、裕直は、違つていた。

二十五才の時、橋立大明神の社に十七日間潔斎して、参籠し、目くら打ちの業を会得したといわれ、八町の内であれば、目隠しをしても百発百中であったといわれている。そのため、稻富伊賀は、曲がった銃でも的を撃つとか、家の中にいて屋根の上の鳥を撃つことが出来るといった誇張された伝説が、まことしやかに伝えられている。

技だけでなく、火薬の調合、距離に応じた照門、照星の考案など、様々な業績を残し、それ等を伝書に書き留めた。

画もよくし、その伝書の中には、射撃の姿勢や彼の風貌をよくとらえた自画像なども描かれ、その才人ぶりが覗える。専念すると、時を忘れ、好んで、智恩寺の僧房に参籠した。火薬の調合も参籠、夢想の中に得たと伝えられている。

稻富家といえば、もともと、砲術に長けた一家で、祖父、相模守裕秀の時に、佐々木少輔次郎なる者が、渡唐して、砲術を伝えたが、まだ、その事が世に知られぬ頃に一色家の出城である弓木の居城に招いて、その術を学び、一巻の砲術書を得たと伝えられる。その真偽の程は、詳らかでないが、祖父の得た砲術の奥義は、嫡子の直秀が三十八才の若さで早逝したため、孫である裕直に伝えられたのである。

裕直は、幼名を長寿丸、長じて、直家、後、伊賀守裕直と称した。生まれもつての素質に加え、砲術一家という環境にも恵まれ、父の早逝もあって元服の頃には、既に、並ぶものがない程の技倆に達していた。種子島に鉄砲が伝えられて以来、信長の鉄砲

天正十年六月二日、信長が本能寺に倒れると、中國攻めに出陣していた秀吉は、素早く毛利と和睦を調べ、急速反転して光秀を山崎に破った。その迅速さは、軍勢を催して清州まで出陣した家康も、先を越されて、なすことなく本国に引き揚げるを得ないといった早さで、多くの諸将は秀吉の幕下についた。

時勢に聰い忠興も、妻の玉子が光秀の娘でありながら、舅の助勢を拒否すると、玉子を丹後の味土野に幽閉して、秀吉に臣従した。その後、秀吉は、当面の敵である柴田勝家を越前の北ノ庄に滅ぼして、石山本願寺跡に壮大な築城を命じ、天下統一へと大きく、一步をふみ出した。大阪城である。諸将には、その周辺に屋敷を建てさせて、妻子を住ませ、主は、それぞれの居城の間を往き来させた。その後、秀吉は、大方の予想通り、着々と天下人への道を歩み始めた。

こうして戦に明け暮れている一日、ある茶席で秀吉は、忠興に向かって、例のくだけた調子で話しかけた。

「お手前の所に稲富流をとなえる鉄砲の名手を抱えていると聞くが、近頃、如何致しておる」

長篠の戦以来、諸将の間には火縄銃の優劣が、戦いの勝敗の鍵をにぎるものと考えて、火薬の調合、銃の改良と、互に鎬を削っていた。

「相変わらずの手練れ振りでござります」

何気ない話し方だけに却って、忠興は警戒した。成り上がりの秀吉には、子飼いの有能な家臣の少ないのが悩みで、有能な士であれば、金に糸目をつけずに召し抱えた。この事が忠興の頭の中になつたからである。忠興は最近秀吉から少なからぬ恩を受けた。それは、味土野に幽閉していた美貌の妻玉子を秀吉の命により許されたことであった。娘始深く愛妻家でもある忠興には、大きな秀吉からの贈物であった。夫婦揃って、城の大広間で礼を言上したのも、ついこの間のことである。

その戸迷いの表情を見た秀吉は、それを打ち消すように裕直の技を一度見せてくれるよう頼んだ。

数日後、城内に於いて、裕直の銃術が披露された。「つくばい、膝立ての腰放し」「寝放し」「中放し」など、様々な姿勢によるものから、更に圧巻は、目隠しによるものなど、いずれも必中の業に居並ぶ家臣達は、感嘆の声を発して、その妙技に陶酔した。

その後で、秀吉は、忠興と二人だけになると、打ち解けた表情でいった。

「どうだ、忠興、あの稲富と申すあれ程の手練れ、そちだけの領分に留め置くは勿体ない限り。他家の者にも進んで学ばせては如何じゃ。諸将もそのように願っている」深い皺が柔和にほころびていた。

その頃、砲術の奥儀といえば、互に秘していた。天下は略々、秀吉の手によって統一されたとはいえ、まだまだ、奥州の伊達、関東の北條、九州の島津と臣従の気配すら見せていない。こう懇ろに秀吉自ら諸将の願いとして頼まれては、さすがに否とはいえなかつた。しかし、心中は、快くなかった。掌中の玉を他人の手で、なぜまわされる不快さである。

こうして、秀吉は、裕直の砲術が、他家にも広く行き渡る様奨励した。そのため、それからの数年間は裕直の生涯に於いて最も充実した時期であつた。正直なところ、細川家に移つてからの生活は、あまり快いものではなかつた。激情家の忠興の性格もさることながら社父下手の裕直にとっては外様の身の辛さは身にしみた。絶えず周囲への気兼ねがあつた。砲術という特技が、却つて、嫉みの種になつていた。そこに秀吉の声がかりである。裕直は、水を得た魚の様な、ほつと、したものを見えた。

しかし、この事は、忠興にとっては、迷惑千万な話で、これならいつぞ、あの茶席で、裕直を予にくれぬかと、いって貰っていた方が、ましだと思つことさえある。我が家臣で、ありながら自由にならぬものがあつた。加えて、既に、名声の定まつた裕直の技倅は、たとえ、主君といえども犯すことの出来ぬ領城である。こゝに忠興の苛立ちがあつた。

ある秋の夜、書院にいた忠興は、何を思つたか、小姓の辰之助を呼んで何事かを耳打ちした。既に、戌の上刻を廻つてゐる。思い立つと時を選ばなかつた。やがて、裕直が呼ばれてやって來ると、忠興の前に跪まづいた。

「伊賀、聞こえるであろう。あの梟の声」

開け放たれた前庭の木の上で鳴いていた。

「毎夜のよう來て鳴くのだ。うるさくて叶わぬ。この夜中にあれを打ち落とす事の出来るのは、そちをおいて他にあるまい」

いつもの事だが、どうでもさせるといういゝ方であつた。皮肉氣な目が裕直に注がれていた。難題だと思つた。

間を置いて聞こえて來る声は、深まり行く秋の夜長に情趣を添えて、とても、煩さ

いなどとは思えない。いいだすと、あとへは引かぬ気性である。

「撃って御覧に入れます」

と、答えるよりなかった。どうとでもなれという気持ちと、何とかなるのではとう自信が微妙に交錯していた。半弦の月夜ではあったが、厚い雲がゆっくりと動いて、

庭や木立ちを銀色に染めているかと思うと、忽ち、漆黒の闇が辺りを掩っていた。

庭に下りて、木立ちの間に梟を探す裕直に忠興が呼びかけた。

「今、辰之助が鉄砲を持って参るから暫らく待て」

相変わらず、厚い雲が動いていたが、幸いなことに僅かな雲の切れ間から月明りが

洩れて、辺りは、銀色に輝いていた。幸運であった。夜目にも自信は、あった。鳴き声が裕直の視線を引きつけた。十数間と離れた庭木の上に、はっきりと梟の黒い影を

認めた。裕直は、素早く、腰の扇子をると、それを構えて、梟の影に向けた。裕直の脳裡にその体形が、しっかりと刻み込まれていた。あとは、月の光も不用であった。

小姓の辰之助が、火のついた八刃目玉の鉄砲を持って来た時は、月は、雲間に隠れて、辺りは闇であった。しかし、裕直は、何気なく、小姓から鉄砲を受けとると、闇の中の梟に向けて、徐に銃床を右肩に当てて身構えた。

しばらくして轟音が辺りに木霊した。

と、続いて木の上に羽搏きが聞こえたかと思うと、地上の落葉に、どさりと物の落ちる音がした。轟音は既に消えていた。

「見事じゃ」

絞り出す様な声を庭の裕直に投げかけると、複雑な感情を必死に抑えた鋭い視線を残して、忠興は、書院を出て行った。

この話は、数日の中に、裕直が忠興に命じられて、闇夜に梟を撃ち落としたと、大阪の諸大名の屋敷に誇大されて広まつた。

名声は、更に上がつた。

その頃の名だたる門人には、福島正則、加藤清正、浅野幸長といった豊臣家の家臣から徳川四天王の一人といわれた伊井直政といった多くの武将やその家臣達までがそのまま下に参じた。

慶長、再度の朝鮮出兵の時、蔚山城攻防に於いて、加藤清正らと共に自ら火縄銃を

とつて銃身が焼けるまで撃って戦った浅野幸長が、その戦いの様子と感謝の言葉を裕直に書いた書簡が現存している。それ程、門人達は、裕直を高く評価していた。

北條氏を滅ぼして、天下を統一した秀吉は、文禄元年一月二日、朝鮮への出兵を命令した。一年程前から対馬領主、宗義智を通じての交渉が手切れとなつたものである。

裕直も、忠興に従つて、遠征軍に加わった。

長い戦国時代を戦つて來た日本軍は、予想通り、圧倒的な戦力で進撃を開始した。

これには幾多の経験をもとに裕直らの手によって改良された日本の優れた火縄銃と銃術がものをいつた。朝鮮軍は、これを鳥銃といつて恐れた。朝鮮軍のものは、勝字銃筒と呼ぶ銃床もない單なる筒状のもので命中率は比較にならない程低かった。このことについて、当時の朝鮮の宰相、柳成竜は、自国の勝字銃筒について

「ただ、虚放して、もって、軍声を助けるのみにて、命中すべからず」

と苦言を提し、日本の火縄銃については、「倭奴、巧戦に慣れ、器械精巧なり、い

にしえ、鳥銃なくして、今これ有り、その速を致す力、命中の巧、弓矢に倍す。我、もし、平野に相遇し、領陣相対し、戦を交えれば、之を敵にすること極めて難し」と賞している。文禄の役は、圧倒的な日本の火器によつて勝利を収めたものの、講和のもつれから、五年後に再び、慶長の役が起る。この時は、前役と違つて、朝鮮軍も日本の火縄銃を模造して、戦力を増強していたし、明軍の大筒、大砲などによる攻撃によつて、かなり苦戦を強いられている。殊に、蔚山の籠城戦では、明軍は、大碗口という大砲によつて発射する震天雷なる導火線付きの弾丸を用い、その爆発によつて、城内の日本軍を心理的にも苦しめた。この時明軍の大砲による猛攻の前に一時は、撤退したが援軍を得てからの反撃は、すさまじく、その様子が前に述べたように浅野幸長によつて、裕直に報せられたのである。この戦いは、別の意味で、日本軍の火縄銃対明・朝軍の大砲との火器の戦いでもあつた。この事は、後に、家康の慶長、元和の大坂城攻めに大きな示唆を与えることになる。

慶長三年八月十八日、秀吉が亡くなると、家康五大老は、直ちに、朝鮮からの撤兵を決めた。

これを契機に豊臣政権も大きく揺れ始めた。福島正則、加藤清正といつた武闘派と石田三成、小西行長といつた文治派の相克である。慶長五年五月、遂に、家康の行状に不満をもつて会津に引き上げた五大老の一人上杉景勝を征討のため家康は、会津に向けて兵を東上させた。同時に、石田三成らも、これを好機と、「家康十三ヶ條の罪状」を揚げ、毛利輝元を盟主として、大阪に兵を擧げた。関ヶ原の役の始まりである。

裕直の悲劇は、この時に訪れた。

三成は、先ず、在阪の徳川方とおぼしい大名の妻子を大阪城に人質に取ろうとして、先ず手始めに、家格といへ、類い稀な美しさとい恰好の人質として、忠興の妻、玉子を選んで、手勢を玉造口の細川屋敷に向かわせた。忠興は、上杉征討の先鋒隊として、会津に向かっていたのである。玉造口といえば、大坂城の南東、内濠の入口で、本丸に最も近い処である。

その時、裕直は、忠興から、細川家の宿老小笠原松齋、河喜多石見の二人と共に、奥方の玉子を守つて留守を命ぜられていた。

嫉妬深い忠興は、大阪を出発するに当つて、玉子が三成の手に渡ることを恐れて、石田の手勢が来た時は、死を選ぶよう命じていた。この事が裕直の生涯に大きな厄いを残すことになるのである。

石田の手勢は、説得によつて、連れて行こうとして、二度、三度と細川屋敷を訪れたが、硬骨の小笠原松齋らは、頑として応じなかつた。

「如何様に申されようと、御内室をお渡し申すわけには参らぬ」

松齋の強い決意の顔を見た手勢の中の主だつた一人が、

「どうしても城にお移りならぬとなれば、明日は、力づくでもお連れ申す」と、最後の通告とも取れる言葉を残して帰つていった。七月十六日のことである。

細川屋敷では予てよりこの日のあるを覚悟して、準備万端整えていたので、小笠原松齋以下、裕直も含めて、家臣ら一同は、心静かにその翌日を待つた。

玉子は、予定通り、その夜、姑や嫡子の嫁、千代姫らに身仕度をさせると、夕闇にまぎれて侍女達と共に逃がした。彼女等は、口々に、共に逃げるようすめたが、玉子の決意は、変わらなかつた。

玉子は、忠興が家康の麾下に入つて、会津に向けて、大阪をたつことを知らされた時、若し、変事が起これば、夫からいわれる迄もなく、死を決意していた。

玉子が、信長の仲人で、忠興のもとに嫁して來たのは、十五歳の時であった。夫、忠興に愛されて、幸せな日々の歳月であったが、天正十六年二月、実父、明智光秀によって起こされた本能寺の変は、玉子の運命を大きく変えた。二人の姉達の夫、織田七兵衛信澄と明智爾平治秀満は、それぞれ、舅光秀の側に立つて、その死に殉じた。殊に秀満などは、光秀の死の後、群がる秀吉勢の中を突破して坂本城に帰りつき、秀夫人、信澄夫人、更に自分の妻らの死を見届けてから、天守に火を放つて、自刃を

遂げたのである。それにひきかえ、忠興は、違つて、母や姉達の死の報に接した時、玉子は、

嘆き、悲しんだ。侍女に清原マリヤと/or>キリスト教徒がいた。玉子は、その清原マリヤから聞くキリストの教えに心のよりどころを求めた。玉子は、その教えを聞くこ

とによつて心の安らぎを覚えた。

それから、二年後、秀吉によつて、幽閉を解かれ、大阪屋敷に帰つて來た時の玉子の人生は、違つて、いた。キリストの教えによつて、自我に目覚め、又、光秀譲りの知性にあふれた強い女性になつて、いた。宮津の居城に側室がいることを知つたのも、その時である。当時の諸大名が、それぞれに、側室を持つことは公然の慣わしであつたが、父、光秀や舅、幽斎、それに幽閉前の忠興らに側室がなかつただけに、又新たなる悩みが生じた。

そこに起きたのが、家康による会津の上杉景勝征討の軍である。夫、忠興は、今度は、又、いべもなく秀吉の恩顧を捨てて、家康の麾下に入った。自らの社稷のためとはいえ、武士の世界の非情さに、玉子は、無常を感じていた。

その夜、総ての準備を終えた細川屋敷は、静まりかえつて、いた。裕直は、自分の居室に、引き籠ると、身辺の整理にとりかゝるとしていた。

明日は愈々、最後の交渉に来る石田勢との間に一合戦あるのは必定であった。夕方、臣達は、玉子の心情をよく知つてゐるだけに却つて、深い同情を覚えた。

裕直も小笠原松齋らと同様、玉子に殉する覚悟であつた。気持ちとしては、忠興への忠誠のためというよりは、玉子のためといった方が強かつた。

しかし、全く迷いが無かつたかといへば嘘であった。他の多くの大名屋敷では、既に妻子は、それぞれの縁故の地に逃げたという話も伝わつてゐる。なぜ細川屋敷だけ



がこの様な道を選ばねばならぬか、それは、単に忠興ら夫婦の間の問題だけのためなのではないかという疑問があった。

裕直にとって、それよりも未練の残るのは、今、目の前にある砲術の書物であった。嘗々として、書き上げて来た伝書も完成を見ぬまゝに戦火に消えるかと思うと、気持ちの整理がつきかねた。

その時、

「伊賀様」

という声が閉めきった障子の外に聞こえた様に思えた。考え方に入していたためか、空虚な響きであった。

二度目の声がした時は、障子は、音もなく開かれて、どこかの家中の武士らしい男が、三人

「ご免」

と、いって、素速く部屋に入つて来ると、障子を再び閉めて、裕直の前に平服した。余りの突然のこと、瞬間、驚いたが、伊賀様という呼びかけに門人ではないかといふ思いと平服した姿に不審は、残つたが、不安は消えた。

前触れもなく、夜に紛れて、無断で入つて来るとなると、余程、火急の用件に違ひなかつた。まして、この様な不穏な前夜にある。

「――」

声も出せず、行灯の傍らで、呆然と座している裕直に向つて、三人は、夫々に間を置かず、口早やに名を告げると、その中の一人が、

「突然のご無礼もかえりみず推參致しましたのは」

周囲を気にしながら、気忙しげに押し殺した声で、話し始めた。見覚えのある門人達であった。

「されば、我々門人は、こゝ数日来、相寄りまして、伊賀様のことにつき、種々相談致しております」

三人の門人が交わる交わるいうのは、こゝ数日来の大坂屋敷の情勢を考えるのに裕直に教えを受けるのは、今宵の外はない、悪くすれば、これが最後になるやもしかれぬので、ほんの一^{とき}ばかり登城願つて教えを受けたいということであった。

「幸い、城とこの玉造口の細川屋敷は、目と鼻の間、まだまだ、教え願いたきこと多

くござれど、ほんの肝要なところのみご教授願い、終れば、差し障りなき中に再び、お屋敷にお送り申し上げれば、安んじて、ご同行下されい」

こゝ一ヶ月程の間、会津征討軍の出発や石田方の不穏な情勢のため、門人達とも殆んど会う機会もなくなつてゐた。この儘行けば、彼等のいう通り、最早、機会は永久になくなるのは必定である。それは裕直自身一番よく知つてゐた。彼等のいうことも尤もなことである。しかし、そううまく事が運ぶかどうかという危惧もある。かといつて、この精根傾けて、書き上げた伝書は、戦火に会えれば、一握りの灰になるばかりである。彼等の願い通り、ほんの一刻、屋敷を空けて、何食わぬ顔で帰つておれば、万事うまく行くのである。門人達の必死の表情の訴えの前に裕直の心は揺れ始めた。

平素からの忠興への潜在的な不信もあった。加えて、秀吉の声がかりで、砲術の師範として、他の大名家への日常的な出入りが、忠興への忠誠に於いて、裕直の心に隙を生じさせていたと、いえなくもなかつた。不首尾の事態の予想は、あつたが、思考から故意に避けた。

「それでは、そなたらのいう通り、同行致しましよう」

己れの言葉とも思えぬ響きが自分に帰つて來た。たゞ、砲術のためとはいへ、この様な事態の前夜に無断で屋敷を抜けるという後ろめたさがあつた。

「おゝ、お聞き入れ下さいますか。それでは、一刻の猶予も出来ません。書物などは、我らが持ちましょ。急ぎますれば、身形などは、その儘で」

と、氣の変わらぬ中にとばかりに予め用意して來たらしい風呂敷に裕直の指示に従つて、辺りの書物を包め込むと、行灯の明りを吹き消した。それから、裕直を前後から守るようして、部屋を出ると、周囲を警戒しながら、裏庭の潜り戸を抜けて、闇夜の中を手さぐりで、城の内濠の入口に向つて北に進んだ。この辺りは、初夏になると、螢の多い処である。濠の石垣と思われる辺りに一匹の遅れ螢の光りが、裕直の心を映しているかの様に不安気に明滅していた。

その翌朝、裕直は、大坂城の何処とも知れぬ一室で夜を明かした。一睡も出来ぬ儘、短い夏の夜は、閉ざされた格子窓の隙間から、白々と明けていた。

まだ、漠然とした将来への不安のために、考えが、まとまらなかつた。ただ、はつきりしていることは、昨夜は、大坂城の何処とも知れぬこの一室で一夜を過し、そのため、最早、後戻りは許されない事態になつてゐることであった。

裕直が、宵に紛れて訪れた三人の門人によつて、この大阪城に誘い出された事が、ち着いて間もなくであつた。

それまでも、そうした不安を考えなくもなかつた。あの内濠の傍らを通りすぎる時、石垣と思われる辺りの遅れ萤の光の明滅が、何となく将来の不安を現してゐる様に思えたものである。しかし、そこは門人達を信ずるよりなかつた。

部屋に着くと、

「まず、腹ごしらえなどを」

と、いったかと思うと、三人の門人は、そのまま引き退つてしまつた。不審に思ったのは、この頃からであつた。たち替り、腰元と思われる女が、膳部を運んで來た。酒もついていた。考えてみると、朝早くから慌しい一日で、朝、腹痙攣をしてから、何も口に入れないなかつた。裕直は、その腰元に、そこにいるよう命じ、急いで食事を終えると、門人達に直ぐに来るよう頼んだ。

腰元が片付いた膳部を持って引き退つて、間もなく、門人達が入つて來た。人数は、八人ばかりに増えていた。いつもと様子が違つていた。一様に、切羽詰まつた表情であつた。その表情を見た時、まさかと思っていた不安が現実のものであるという危惧に変つた。

しかし、初めて、門人達から、交る交る細川屋敷に帰る愚を説かれ、思いとどまるよう告げられた時は、素直に、受け入れる気にはなれなかつた。武士としての意地があつた。玉造口の細川屋敷といえば、同じ城内といつてよい程の處である。裕直は、その眞情を謝しながらも、自分の立場も訴えたが、門人達の意志も固かつた。

門人達は、口々にいった。

「東上した諸大名屋敷の昨日來の動静を見るに、殆どの妻子方は、人質を恐れて、秘かに国元又は縁者を頼つて、退去されています」

加藤清正の奥方などは、船の一重底に隠れて脱出したといつてゐるのか

かつた。

「何、それ程迄して、皆、脱出されているといわれるのか」

こゝ一、三日、石田方との掛け合いに氣を奪われていた裕直らは、外の情勢には疎く、細川公の奥方だけですぞ。何の訳かあってこ自害なさるのです。細川公の焼餅やきは、天下に隠れなき事実、夫婦の痴情がらみのご自害に殉するなど、全く、持つて、

犬死に同然、伊賀様程の砲術家をその様なことで死なすわけには參りません。とくと、ご思案あれ」

門人達のいうことに一理は、あつた。細川家に仕えて、間もなく、父、幽斎の隠居後、忠興の代になってからは、心安らかな日は無かつた。強情で、猖介で、その上嫉妬深い性情は、外様の身の裕直には一層馴染めなかつた。裕直にも裕直の砲術についての自負があつたが、忠興にとっては、裕直は、利用価値のある外様の臣に過ぎなかつた。殊に、秀吉の声がかりで、他家の門人も許されるようになつてからは、主君といえども犯すことのできない裕直の一芸に対する苛立ちが感じられる様になつた。

だから、時には、譜代家老の小笠原松斉らの忠興に対する律義な仕え方が裕直には滑稽で馬鹿氣でさえ思えることもあつた。故郷の地、弓木城を捨てて、一芸に生きて來た裕直には、その律義に生きねばならぬ武士の社会を時には疎ましく思つことさえあつた。そこに起きたのが石田勢による徳川方大名屋敷の人質事件である。

考え始める裕直に門人達は、説得を続けた。

「去る文禄、慶長の役に於いて、明・鮮の大軍を打ち破ることの出来たのも、伊賀様の砲術と優れた鉄砲が大いに物をいつたからでござる。あなたの砲術は、徳川方のものでもなければ、石田方のものでもない。日本のものでござる。更に、奥儀を極められるが、伊賀様の務めでございましょう」

この言葉ほど、砲術に生涯をかけた裕直の心を動かすに魅力的なものはなかつた。しかし、明日、石田勢が細川屋敷にやって來た時に玉子以下家臣達の選ぶ道を思うと、門人達のいうまゝに従う決心はつきかねた。苦澀に満ちた顔の裕直に門人達は、最後の言葉を投げかけた。

「これ程迄に申しても、尚、細川屋敷に帰るといわれる段においては、我々は、力づくでもお止め申すでござろう。」

総ては、この様に仕組まれていたのである。それを聞いた裕直は、がっくりと肩を落として、うなだれた。

苦惱の一晩を過ごした。

この出来事は、裕直にとって生涯の負い目となつた。

その後、裕直は、諸家を転々として、浪々の身となつた。この事を知った忠興は、関ヶ原の役が終わると、草の根を分けてでも探し出して、手討ちにせんといって烈火の如く怒つた。その為、裕直を庇う大名は、数多くいたが、忠興と事を構えることを恐れて、仕官させることを憚つた。大名達は、忠興に赦すようとりなしたが、「若し、仕官させるにおいては、弓矢をもってでも挨拶仕る」と、にべもなく撥ねつけた。

その頃、裕直は、熱心な門人で徳川四天王の一人といわれた伊井直政のもとに身を寄せていたが、直政は、このことを自分の娘婿である、家康の才四子、清州城主松平忠吉に話した。その話を聞いた忠吉は、裕直の優れた砲術の絶えることを憂えて、忠興とのとりなしを最後の切り札ともいうべき家康に頼んだ。家臣の死にかかる難しい問題である。家康も考えた。

関ヶ原役、直後のことである。福島正則は、この戦勝を北政所の見舞に入洛していれる伴刑部正之に一刻も早く知らせたいと思って、その役を家臣佐久間加左衛門にいいつけた。

京への入口、日岡峠の麓に設けられた落人狩りの番所に来た時、加左衛門は、止められた。

「福島正則の家臣でござる。主命によって入洛仕る。お通し願いたい」

関ヶ原役勝敗の殊勲者であるという自負が馬上の加左衛門にあつた。番卒は、その態度が気に喰わぬとばかり馬の轡(くわ)を取つて引き返さそうとした。

「福島といえども通すわけには参らぬ」

こうして話は、もつれて、遂に加左衛門は手傷を受けて追い返された。帰つた加左衛門はこれを正則に報告すると、その夜、主命を辱めたとして、自害した。それを知つた正則は、伊井直政を通じて、責任者、伊奈図書の首を家康に要求した。重臣である直政は、代つて番卒の首をと、いたが、正則は、番卒の百や二百であるよりも図書の首一つがほしいと肯じなかつた。困じ果てた家康は、側近本田正純の言を入れ、「如何なる処で如何なる死に方をしよう」と、予への忠節は変わらぬ」と、諭し、死を命じて、爪を噛んだ。

数々の家臣の死を経験して來た家康が忠吉の頼みに迷つたのも無理からぬものがあつ

た。忠興の性格をよく知っているからである。しかし、敢えて、家康は、裕直の一芸を重んじた。

既に、大御所として、駿府に隠居していた家康は、茶席にことよせて忠興を駿府に召じ、さりげなく、昔話から始めて、漸く世の中も平和になりつゝあることにふれてから、「わしも、既に、六十九の歳(よ)を迎えたが、まだまだわしが生き長らえることを望む者があるであろうか」と、問い合わせた。

「何を仰せられますか、まだ、世の中は治まり切つたとは申せません。どうして、大御所様の一日も長く生きられることを願わぬ者がおりましようや」

大阪には、巨大な城と財力を無傷のまま持つた秀頼母子がいた。

「おゝ、そう思つてくれるか。わしは、生来我が身の養生にと、野山に出ての鷹狩りと鉄砲撃ちを心掛けて來たが、これからも、そうありたいと願つておる。そこでじゃ、その鉄砲撃ちを伊賀に習おうと思うのじゃが、何んと、その憶病者の伊賀を赦してはくれまいか」

大御所、家康の膝を交えての一言である。忠興は、許し、再び、土分に復することを認め、その身を家康に任せた。

その日、家康は、忠興に小松内府重盛が宋の経山寺仏光へ金を送つた時の返簡、京極黄門定家卿真蹟の和歌など古今の名品の数々を与え、忠興の機嫌をとりもつた。

早速、家康は、裕直を駿府の城に呼んだ。部屋には、平素よりも燭台の数を増やして、明るくし、裕直が臆する程にした。厳しい戦国の世を生き抜いて來た家康は、一芸は認めたが、非は非としたのである。

その夜は、数々の鉄砲咄しに一夜を過ごし、以来、思うところあって、裕直は、剃髪して、「一夢」と号した。

その後、直政は、裕直を家康に推舉したが、忠興の手前もあつてか、容易に召そようとしなかつた。その頃、忠吉が礼を厚くして迎えたので、直政のもとを去つて、尾張に行つた。直政は、その行為を怒つて、激しく非難した。それを聞いた忠吉は、

「卿等誤れり、裕直ノ勇怯何ゾ銃術ニ関ゼン、須ラク其技ヲ学ビ、其怯ヲ美レ」と、家臣達を諭した。土分に復したもの、既に、裕直には、一砲術家としての合理的な生き方が、身についていた。

駿府に居を構えた裕直は、間もなく、忠吉が早逝したのを機に家康に召され、砲術の教授の傍ら、幕府の鉄砲工廠といわれる近江、国友村の奉行を命ぜられ、火縄銃や大筒の改良、製造の差配に当たった。

家康が裕直を許した裏には、家康にとって、重大な企図があった。

將軍職を秀忠に譲り、大御所として駿府に隠居した家康は、七十を越えて、尚、不安の種があつた。それは、不落を誇る大坂城と秀頼母子である。これを片付けなければ安じて目を瞑れなかつた。その大坂城を攻略する最も有効な武器は、蔚山籠城戦に於ける日本軍苦戦の教訓から、大筒や大砲であることを戦略家の家康は、よく心得ていた。朝鮮役を起こした秀吉は、自ら築いた堅城の攻め方を皮肉にも家康に教える結果となつた。

より大きな大筒、大砲の製作を命ぜられた裕直は、浅間山麓で、大筒の試射を行つた。家康は、自ら大筒を三発うつて三発とも命中させたと記録に残っている程である。

因に家康は、大筒、大砲の製作は、他にも堺の鉄砲鍛冶、芝辻理石衛門達に命じ、慶長十四年十月には一貫五〇〇目玉の大砲の製作に成功している。家康は、それだけで安心せず、オランダ商館を通じて、四貫、五貫目玉の巨砲も購入して、大阪冬の陣では、数百門にのぼる大筒、大砲を諸所の寄口に据えて、晝夜の別なく猛砲撃を加えた。その砲声は、遠く京都に迄達したと「時慶卿記」にも記されている。堪らず、淀君は、和睦に応じ、内濠まで埋められて、夏の陣で豊臣家は滅亡する。

裕直は、大阪の役までは生きられなかつたが、家康に召されてからは、江戸、駿府、国友村と東奔西走の傍ら、門人達の指導、自らの稲富流奥儀書の完成と平穏で忙しい毎日を過ごしたようである。この頃、たまたま、加藤清正が伊勢の桑名に来た時、裕直と偶然、会うことがあつた。そこで、清正は、一日、家臣に素撓（弾を込めず、姿勢をとるだけ）で教授させ、門人とさせた。後日、その家臣達が、「あの様な素撓を一度きり行って、何の効果がありましょうや」と、訝る、

「加藤が家臣には、稲富の門人が幾十人もいると聞えるさえ、敵は、臆するのだ」と、論したという逸話がある。

この駿府の頃、漸く、稲富流砲術の伝書「一流一辺書」十一帖、「極意」九帖、「大極意書」九帖の計二十九帖が完結している。

晩年の裕直は、病い勝ちのため、病床に伏すことが多くなり、さすがに多かつた門人達の出入りも次第に遠のき始めた。

これを聞いた浅野幸長は、紀州の居城に裕直を招いて、療養に務めさせ、裕直に銀子百枚、御内儀に銀子二十枚を当座の費用として与えて駿府に帰えしている。

しかし、病状は、一向に改まらなかつた。枕邊の老妻と話し合うことは、故郷、丹後弓木の里のことばかりであった。既に、四十数年の歳月が過ぎていた。智恩寺の参籠のこと、鉄砲を携えて野山を馳けたことなどが懐かしく思い出された。一度も帰つていなかつた。風の便りでは、城は廃墟となり、雑草の生い繁るまゝという。帰るにも帰れなかつたのである。

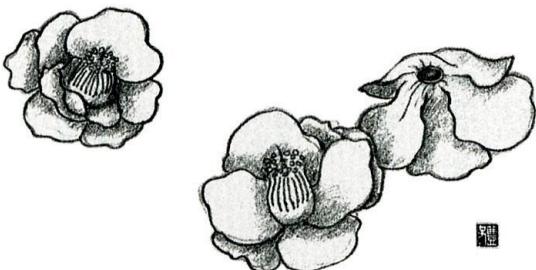
振り返つてみると、弓木の城を去つてからは、一芸あるが故に、主家を転々とした放浪の生涯といつてよかつた。砲術という理学の世界に生きた裕直が、義に生きる武士の社会に順応し得なかつたことは、あるべき宿命というより外はない。関ヶ原の役によつて起きた細川屋敷の変事は、生涯の負い目となり、士分に復したとはいえ、他の武士とは遊離した孤独なものであつた。

その後、病状は、更に進み、尚、故郷、丹後弓木の里を懷かしみながら、異郷の地、駿河で、六十二才の生涯を閉じた。

これを伝え聞いた丹後の領主、京極高知は、智恩寺の境内に墓碑を建て、郷里の生んだ高名な砲術家として、その靈を慰め、月毎に遥拝を欠かさなかつたと、京極家の記録に伝えている。

京極家は、もと、江北六郡の領主であったが、家督相続の内紛から、家臣浅井氏らによつて逐われ、兄、高次と共に諸家に客食して、転々と放浪の辛酸を嘗めた。

高知が、裕直の墓碑を裕直が死の床で懷かしんだ智恩寺の境内に建立するに至つた心情の背景には、高知自身、戦国の世の放浪の憂き目を身にしみて知つていたということがあつたのではなかろうか。



難

三十八年ぶりの政権交代

一 前途多難な細川政権 一

NHK政治部記者 堂 元 光（山崎町岸田出身）

「自民党とは、体質・感性・手法、全てが違う」……八月十日、連立政権誕生後はじめての記者会見で、細川首相は、「変革」への決意を強調した。ベンを片手に、質問する記者を指名する姿と共に、「政治改革法案が年内に成立しない場合、政治責任をとる」とした細川首相の発言は、政界に波紋を呼んだ。就任早々の首相が、進退問題に触れるのは、極めて異例だが、細川首相は、記者団に対し、「当たり前のことだ」と、いつも簡単に言つてのけた。細川流の政治手法の一面を示す一幕だ。

細川政治のキーワードは、言うまでもなく、「変革」だ。

対外的にみれば、旧ソ連の消滅・ベルリンの壁の崩壊に象徴される東西冷戦の終結が背景にある。アメリカでは、一足早く、「変革」を訴えたクリントン政権が誕生、共和党から民主党へと十二年ぶりに政権が交代した。韓国でも、三十二年ぶりに民政政権が誕生。細川首相の言葉を借りれば、「歴史の必然」ということになるが、日本にとっては、冷戦後の新たな国際秩序づくりに向けて、政治・経済両面で、より一層の役割を求められている。

一方、国内的にみると、細川連立政権の誕生は、「窒息死寸前」の政治状況が、その背景にある。三十八年間に及ぶ世界でも例のない自民党長期単独政権は、リクルート事件・金丸脱税事件ゼネコン汚職に象徴される腐敗を生んだ。政官財の癒着構造が指摘され、政治・経済・社会の構造改革を余儀なくされていると言える。

こうした中で、細川首相は、政治改革・行政改革・経済改革の三大改革を打ち出した。いずれも、痛みを伴う問題ばかりだ。一步、舵取りを誤れば、ガラス細工と言われる連立政権の基盤を揺るがしかねない。

確かに、最優先課題である政治改革は、法案が衆議院を通過し、与野党政防の舞台は、参議院に移った。五年越しの政治改革論議は、最後の段階を迎えていた。しかし、政治改革法案の成否以上に、問われているのが景気対策だ。自民党政権時代から数々の緊急対策が打ち出されたものの、日本経済は、依然として、不況から脱

却できない状況が続いている。当面、▼大幅な所得税減税を実施するかどうか、▼その財源として、消費税の税率を引き上げるかどうかが焦点になっている。アメリカをはじめ、先進各国は、日本を世界経済の牽引役として位置付け、日本の内需拡大に向けて、大幅減税の実施を強く求めている。ただ、減税即消費税率アップは、国内で、強い反発があり、難しい政治判断を強いられるのは確実だ。

また、厚生年金の支給開始年令の見直し問題もある。雇用問題もからんで、支給開始年令を、単純に、現在の六十歳から六十五歳に変更するわけにもいかない。税制・年金を含めて、「国民負担」をどう位置付け、理解を求めるのか、不透明だ。更に、コメの市場開放問題への対応も難題だ。大詰めを迎えているガット・ウルグアイラウンド交渉の進展によつては、日本は、一定の譲歩をせざるをえない。「コメの関税化問題を、一定期間、先送りする代わりに、最低輸入量を設定する」という案で、決着が図られるのではないかという観測が強まっている。

コメ・消費税と言えば、かつて、リクリート事件と共に「三点セット」として、自民党批判の代名詞になったテーマだ。細川首相も、政権の命運を賭けた政治改革が実現するまでは、できれば、論議を呼びそうな課題に手をつけたくないというのが本音のようだ。いずれの課題も、国内政治的の面で言えば、長年、タブー視されてきた問題であるが、外交問題とも直結しているだけに、避けて通れない課題だ。果たして、「タブー」に挑戦できるかどうか、「細川変革」の試金石と言える。

戦後、まもなく、半世紀が過ぎようとしている。外国からは、貿易摩擦・国際貢献をめぐって、経済大国・日本への風当たりが強まる一方、国民一人一人は、「眞の豊かさ」を実感していない。高齢化社会・土地住宅・農業など、二十一世紀に向けた総合的なビジョンを示すことが、時代の要請と言えるかもしれない。

連立政権発足後、百日が経過、細川首相は、七十七年前後という歴代内閣で、最も高い支持率を誇っている。

「時代は海、国家は船、政府は帆、そして国民は風」……

細川首相は、「変革」への第一歩を印したが、その具体像は、依然見えない。三十八年ぶりの政権交代が何をもたらすのか、「細川変革」の実像は、これから問わることになる。

(平成五年十一月末記)

筆者のプロフィール

昭和49年 NHK入局。
昭和54年 政治記者として、外務省、各政党を始めとして、防衛庁、などを取材担当。
平成5年夏、細川政権発足に伴い、総理官邸キャップとなり、細川総理初渡米に同行する。

あるパーティの席で

京都大学名誉教授 上山安敏（山崎町山田町出身）

毎年秋を迎えると、各地で受賞式が行われる。最近いろいろな文化賞が設けられている。私も三年前に和辻哲郎文化賞を戴いた身だけに、その社会的意義について強い関心を懷いてきた。

ところが、最近また文化賞に関係することになった。十月上旬に出版社から電話がかかって、我々の関係した本が、「日本翻訳文化賞」に決定した、という。そのときは私も耳を疑った。この「日本翻訳文化賞」というのは日本翻訳家協会が三十年前に設けたもので、今日三〇回を迎える伝統のある文化賞である。この協会はユネスコの国際翻訳家連盟で日本を代表している。我々学者仲間ではとても届くことのできない存在だったから、嬉びも一人だった。

受賞の対象は、バハオーフェン著『母権制』である。上下巻合せて一、四〇〇頁に達する。私が出版社（白水社）から依頼を受け、教え子三人が訳出した。私は当今流行の監訳というスタイルは嫌だったから、解説を担当し、翻訳者は三人になつている。だから受賞者は彼らであつて、私ではない。私はパーティでの祝辞の側に廻つたのである。私たちが嬉しかったのは、いま洪水のように外国の翻訳書が出版されているが、その中で一点選ばれたというだけない。バハオーフェンの『母権制』は同時期に三社から競合して翻訳がなされており、その中から選ばれたということも喜びを倍加させたわけである。

何故選ばれたかを考えると、いま日本の知識人の間にバハオーフェンという人の、一三〇年前に書いた『母権制』が静かなブームを引き起こしている背景がある。この本は、人類の歴史には男性優位の社会以前に女性優位の社会があつたことを告げたのである。これが七〇年代以降フェミニズム（女性主義）、エコロジー（環境保護）が盛んに論じられるようになった風潮と関係している。受賞式は、外国人を含めた関係者四、五十名が毎日新聞の九階大會議室に集まつた。ところがこの賞は、訳者個人に与えられる日本翻訳文化賞とともに、日本翻訳出版文化賞

として三出版社と特別賞として一社が選ばれていた。そのために式後のパーティは、日本の出版編集者と学者の交流の場になつたわけである。したがつて、その会場で翻訳という仕事を通じてメディアを発す現場の動きが手にとるよう興味深かつた。

先ず外国の本を選ぶのも大変だが、訳者との出会いが決定的であること、これらが編集者と訳者の双方から語られたときは臨場感があつた。これは我々の『母権制』についてもあてはまる。私が依頼を受けて訳者が翻訳にかかるからほぼ十年になる。その間に三人とも一年以上の海外生活をし、当時助教授であったのが教授になっている。この様な発言と関連して、協会本部の方がいかに翻訳業というものが報酬が少ないものであり、生活をしていけないのかを、アメリカを例にあげて紹介されていた。すると同席していた外国人たちがその反論を述べていた。彼らは外国人の側から翻訳家団体をつくつており、翻訳というのはすごく儲かるものですよという。つまり日本の協会側のいっているのは、アカデミックな世界について紹介しているのであり、外国人の側は、ポピュラーで、ジャーナリストイックな分野の作品を斡旋しているのである。彼らは是非よい作品を紹介して下さいと団体の宣伝も忘れなかつた。これはアメリカでもアカデミックな仕事が地味なものであり、困難なものであることを伝えていた。

日本の文化がつくり出される過程で考えさせられる発言をされたのは、小学館の編集局長であった。小学館は、「朝鮮語辞典」を韓国の出版社の協力で今年発刊したのが受賞の対象になつていて。彼はこのような地道な仕事が賞を受けたことは、当社がコミックで収益を得てることを相殺する意味をもつてていると述懐された。確かに世界に冠たる日本のコミックは、講談社、小学館、集英社というわが国の出版の最大手で発行されている。コミックに経営が依存する度合が大きい。隣に立っている岩波書店が「志」「良心派」を口にする理由が分かる。大量の屑紙の消費こそ地球の森林伐採の元凶だと皮肉られるマンガ。青少年の愛読するマンガに支えられた出版文化。奇妙な日本文化を考えさせられる一場面でもあつた。

筆者のプロフィール

ドイツ近現史の法と国家の分析、社会科学とその制度化の問題を研究する著書「ウェーバーとその社会」「法社会史」「憲法社会史」「神話と科学」「フロイドとユング」など、その他多数。

短歌

平成五年回顧

山崎歌人協会

稻村幸子

代表山本千代様、新潮会代表塚田栄一氏の弔辞があり、山崎歌話会よりは弔歌を献じた。

秋山を好みたまひし君なれば黄泉路は

落葉散り敷きてあれ 歌話会代表

氏は好んで秋冬の裏山を散策され、その歌も多い。

偶々七月末、姫路文学館より、昭和四

十年代に県内より出版された歌集の中、

藤村省三氏の「雪の音」につき私に執筆の依頼があった。『雪の音』は氏の第一

歌集で、四十年間の教職を退き作歌生活

に入るための転機として、過去二十五年

間の作品から八百七首を選び一巻とされ

たものである。歌話会の例会で氏の秀作

に接していた私はこの歌集に強く心を惹かれていたので、非力を省みずお引き受けし、精根こめて執筆した。

「愛日」より
「無能飽醉太平春」職無くて欲なき

日々の楽しみ多し 太平の春

(良寛禅師の詩句に寄す)

「無能飽醉太平春」日の当る冬木のご

とき老と言はむか

「無能飽醉太平春」雀らに撒く米つぶ

に雀来らず

「無能飽醉太平春」われはまた背に跨

りし孫に馴さるる

「無能飽醉太平春」並びたる到来の酒

見つつ友待つ

「遍路」より

「落葉の節」「対偶」と順次発行され何れ

大いなる運命の中にたどよへる微塵の

ごとき遍路の一歩

く探しし自己の歌風を確立された作品の集である。此處に五冊の中より数首ずつ抄出し、氏を偲ぶよすがとさせていただきたいたい。

「雪の音」より
雪山の夕映うすれゆくまでを待ちてて

己あざむき難し

別れたるあととの心のあたたかに音キク

キクと夜の雪を踏む

降るとしもなく降り出づる雪の辻撃たれし猪を片寄りに置く

雪の上にただよふ闇を帰りゆく明日ある子らの遠き歌ごゑ

聚落を離れて一つ点す家藁打つ音を雪にひびかす

「落葉の節」より
落葉には日の匂ひして冬山の動くもの

自らを守りゆくべし

一日の差せる方に吹かるる枯落葉われはなき屋の寂かさ

瞬の日照雨に濡れてしづかなる径の落葉の光踏みゆく

身辺の瑣事のがれたる日のごとく身を置く墓地の落葉の中に

吹かれゆく落葉の行方目に追ひて人に吹はざる墓地に安けし

「対偶」より
老一人部屋をたがへて住む家の朝しづかなり屋も静かなり

口きかぬ日もありながら対偶のあるとふ事の老いて有難し

書斎に籠る吾とテレビを見る妻と買物にゆく時に連立つ

それぞれに墓地を買ひたる娘の話聞き

をり老いて墓地なき我等

愚痴聞くも母の役目と受話器もつ妻が

疲れて噂りるる

老いてなほ消えぬ我執をもちてゆく沈む夕日に染む遍路みち

ここに来てかなしき便書くもるむ谷の

極みの札所のポスト

女厄坂男厄坂登りきてああ六十一段の還暦の坂

昨日のごと今日もあるべし辿りゆく遍路の道の老の独り言

「落葉の節」より
落葉には日の匂ひして冬山の動くもの

昨日のごと今日もあるべし辿りゆく遍路の道の老の独り言

「落葉の節」より
落葉には日の匂ひして冬山の動くもの

昨日の差せる方に吹かるる枯落葉われはなき屋の寂かさ

瞬の日照雨に濡れてしづかなる径の落葉の光踏みゆく

身辺の瑣事のがれたる日のごとく身を置く墓地の落葉の中に

吹かれゆく落葉の行方目に追ひて人に吹はざる墓地に安けし

「対偶」より
老一人部屋をたがへて住む家の朝しづ

かなり屋も静かなり

口きかぬ日もありながら対偶のあると

ふ事の老いて有難し

書斎に籠る吾とテレビを見る妻と買物にゆく時に連立つ

それぞれに墓地を買ひたる娘の話聞き

をり老いて墓地なき我等

愚痴聞くも母の役目と受話器もつ妻が

疲れて噂りるる

十月二十二日、古刹青蓮寺において氏の葬儀は厳粛に執り行われた。県歌人クラブ代表米口実氏の弔辞につづき新樹会

「落葉の節」「対偶」と順次発行され何れ大いなる運命の中にたどよへる微塵の

ごとき遍路の一歩

◆藤村省三先生追悼歌会詠草

(十一月七日・山崎文化専門学校)

仰き見る五巻三千首 流行に阿らぬ君

が歌屹立す

稲村 幸子

師の日ごろ愛でましし白菊にかこまれ

て短歌の佛となり給ひたる

北川 智恵

在りし日の健やかなりし御姿のたち来

青柳 良

て無常の秋の風沁む

今生の別れと知らず机に対ひ師の添削

を昨日受けしに

藤原 すみ

怠らず歌会に出よと人づてに給ひし御

山崎きよ子

帰りのバスの無き理由にて師の通夜に

ゆかざりし悔日毎につのる

新田 弘美

黄泉の路ひとり行きます師の行く手野

花咲き満てやはき日の照れ

北 隆二

木洩日を揺りて栗の葉ちちに舞ふ落葉

の節に師は逝きたまふ

栗山 節子

突然に独りとなりて旅立たす師に黄泉

の日よ燐燐と照れ

安東はつ子

はじめての歌稿十首の右肩に師は文語

でと書きたまひたり

森本萬千子

各地短歌祭入賞入選作品

◇菅原道真公奉贊獻詠祭

(三月二十一日・稻美町天満宮神社)

・兵庫県歌人クラブ賞

エレベーターの階のボタンをみな押せ

り両眼見ゆるもの顔して

森谷 康弘

◇第五回神戸短歌祭

(四月二十九日・神戸市立婦人会館)

・半どんの会賞

仔牛らの四肢をくぐりて射す夕日餌を

やる吾の動きに搖るる 伊東まさ子

・入選

洗はむと夫のズボンのポケットに心を

覗くごと手を入れぬ 安東はつ子

・佳作

ふと吾の動かぬ瞳に気づきしか行商の

男声なく去りぬ 森谷 康弘

差し込むキャッシュカード暗証番号

は夫の命日四文字を秘む

・入選

安政 嘉子

◇ふれあいの祭典、93短歌祭

(九月二十六日・加西市民会館)

・入選

幼児の三輪車のみ残りるる車庫に破産

を告ぐる貼紙

伊藤まさこ

◇第十二回郡民短歌祭

(八月二十一日・ハリマ農業共同組合
経済センター)

・神戸新聞社賞

信号に立ち止まりたる盲導犬の耳そば

たてて主に寄り添ふ 山本 千代

・宍粟郡文化協会連絡協議会賞

六十歳過ぎて職ある喜びに屋根塗り替
への材料を積む 北 隆二

・はりま一宮ライオンズクラブ賞

若葉洩る朝のひかりは嬰兒の額の産毛
を金色に染む 近嶋 タミ

・一宮文化協会賞

軋みつつ車庫に入りゆくトラックタ
並び終りて灯を消しぬ 森本萬千子

・穴粟郡歌人連盟賞

一文字に噤める口の五つ並ぶつばくろ
の巣の束の間しづか 中田 博子

・新宮町長賞

野良帰りの母の手袋つんつんと芽吹く
山椒の香りを放つ 森谷 康弘

・奨励賞

ぼこぼこと排水溝に吸はれゆく水音老
いの独り言めく 富和かず子

・アルバムの一隅占めて在りし日の夫健
やかに素麺を干す 安政 嘉子

・人間の檻」とふ中に手を入れて猿ら
しきりに餌をねだれり 篠本 久子

みちびきシートの下に肢折りて盲導
犬は蹲りたり 山崎きよ子

客の眼に晒されながら廻る寿司売れぬ
いくつが次第に乾く 安東はつ子

たをやかに在す觀音の足首に値段を記
すレッテルを貼る 安東はつ子

峠の道滑木を積みて盲われ母が先引く
棍手を握る 森谷 康弘

俳

句

山崎俳句協会青嶺句会

秦千里

岡山県粟倉吟行記

四月十一日十時和田疎人先生ご夫妻をはじめとする一行十六名はうすら寒い中車中の人となる。

車は一路中縦を西へと走る。

待望の吟行とあって各々ときめきに心あたたまる思いである。

窓外の山はむらさき野は黄色、特に連翹の黄の鮮やかさに旅心をそそる。佐用インターを降りて車は、北へ北へと進み岡山県に入る。

途中剣豪武藏生誕の里に下車探訪す。

花見時と日曜とあって、里は観光客に賑う。会員は三々五々花冷えの広い苑内を、句材を求めて散策する。

剣豪の生誕の地や連翹黄

とみ代

碑文よみおれば花冷どつと来し 泊水再び乗車、程なく目的地粟倉荘に到着す。

昼食までの時間、荘の内外をそぞろ歩き併みそれぞれ句想に余念なし。

山荘の鯉沈みて桜冷え 小次郎

春寒の庭広々と土佐みづき 君子

その内山海の珍味に工夫をこらした馳走



の数々運ばれ珍らしさに話もはづみ美味しさも一人、楽しい昼食を終える。

木々芽吹く天指すものは天を指し

青空のすと遠のく木の芽風 八重

一丈の碑文仰ぐ花の屋 茅子

せせらぎも春の音して山の里 光子

米寿なる師をことはぎて花万朵 良子

せせらぎの劍豪の里さくら冷え 南嶺

花ぐもり地蔵の御手に忘れ数珠 いし

星月夜ジャワの高原俘虜の頃 池田 陶瓦

夏帽子振って見返り孫帰る 尾崎すゞ子

陽だまりの水のささやき猫柳 尾崎いつゑ

春灯に爪染め妬心静めけり 岡田 瑞穂

登り来て山門仰ぐ青葉風 小倉 つね

外苑の玉砂利踏みし空は秋 小倉れい子

旅ひとりもの憂き夜のちぢるかな 垣口 翔人

魂去りし冷えゆくほゝを両の手に 教師若し涙める子等駆けさせて 和田 疎人

三桙の黄の花まりをかんざしに 千代
菜の花の影をおとして川流る ひろ
気にかかる一事を胸に花むしろ 千里
句会も盛会に終り、午后三時粟倉荘を後
にす。

帰途アワクランドに立ち寄り、かたぐりの花展示場などを見買物等もする。そ

の間凄まじい轍まじりの春雷に見舞われ

轍やかな車中となる。

四時過山崎に帰着。コーヒーに憩いの

一刻を得、今日一日の楽しかった事語り

合い次回の吟行を約して解散す。

稻雀波ひく如く隣田へ

深山路に紛れし色や吾亦紅

潮騒に髪なぶられて春の磯

今我は阿弥陀の加護か春の月 牝川 信子

杉木立小川のせせらぎかじか鳴く

西村 好江

椿林かずゑ

黄コスモス蘇鉄の根もと鮮やかに

原田 久代

長閑さや歩くも樂し萌えるもの

姫野まさこ

觀音の岩間に石蕗の花灯り

前野さつき

★★★★★★★★★★

古典聞く会も晩学業平忌

高野 薫風

野も山も枯れ進みけり蟻蟻も

小嶋 弥生

農耕がぬ貌が揃うや秋まつり

小畠 柏人

青嶺句会詠草

鎬矢の如く天まで揚雲雀

青嶺句会観月句会詠草

吟行の四月十一日の雪

原田小次郎

(平成五年九月三十日於 山崎最上山)

雨後の徑散り敷く落葉真くれない

凶作の野面をかくす今朝の霧

芦田 八重

湖走る蛇一條の水脈残し

原田 百合

無月なる古刹の庭に空仰ぐ

小春縁置薬屋の富山弁

秋久 光子

紫に透けてワインの秋の彩

原田 駆雲

臥す吾に合せ鏡や今日の月

秦 千里

山岸 園子

病人の人恋しがる秋の雨

石野 光栄

犬連れの馴染みとなりし露の径

原田 駆雲

虫をきく無月の月を待ちながら

高野 薫風

打つ鐘の余韻地を這ふ冬の草

空瓶を積む秋風の高さまで

大谷 延子

着る事もなき衣ばかり虫払い

春名 寿女

我が思ひ届けと願ふ今日の月

芦田 八重

藤井 七代

人形の目の隅青く梅雨深む

岸野 昭三

点となり光となりし揚雲雀

藤家 千代

無月なり床の軸など賞でもして

下村 君子

壺阪加代子

蜻蛉の尻もて打つや水の面

高野 南嶺

山彦に答ふ山彦秋晴るる

福田 泊水

玄関に大文字草夜の坊

石野 光栄

夫看取り帰る厨は夜の秋

庄 昌子

餅の手をかくすすべなし祝ぎの座に

下村 君子

家業守り古き糸団を曝しけり

福田 泊水

青白き銅の神馬や月の下

永井とみ代

コスモスのひねもす風に疲れけり

小林 紫生

柿若葉峠のこゝらは屏持たず

杉本 いし

風あれば風にしたがふ秋桜

山田 東軒

折鶴の千の翳もつ良夜かな

原田小次郎

月兔信じいし日を巻き戻す

川崎 栄子

春めくや茶席の干菓子色淡く

杉本 美保子

恙なき恩師と集う良夜かな

山口 栄子

秋久 光子

母の忌や母のぬくもり縁小春

薄木満寿恵

幼な名で呼び合い郷の盆おどり
田中 良子

月淡く姿見せつゝ雲止まず

和田 疎人

雨止みて無月の空の薄明かり

田中 良子

秋拾外出する日の続きたる

和田 疎人

夏休み女教師母の貌となる

永井とみ代

迅き雲流れるゝばかり無月かな

福田 泊水

墓洗ふ父の齢をはるか越し

中尾 悅生

藏人の餅より生れし酒を酌む

中嶋 ひろ



さわらび句会

北欧の旅に思う

藤井慧乘

「スウェーデンの神秘性が好き
清廉なイメージが好き
ノーブルなやしさが好き
こうつぶやかせる私の心を
やさしく包みこむ森がある、湖が
町が、人がある。」

—スカンジナビア観光局—

この言葉は、私達を招待してくれたオットーさん夫妻のイメージにピッタリ。そしてその国人の人達と文化が理解出来る思いで、私達の大きな冒險の旅を勇気づけてくれました。

スウェーデンの童話に「ニルスの冒險」という話があります。ニルスの前に大きな鶯鳥が羽根を抜け^{ひき}て「さあどうぞ」とすすめる。今乗らなければ一度とチャンスはない。「エイ」とばかりに飛び乗って見たら、すばらしい世界を見ることが出来たという話。

私達のハリマクワイヤーと言う合唱団の旅は正にこの通り、冒險と決断となり振りかまわぬ実行の中に、不思議な僥倖^{ぎょうこう}にめぐまれたすばらしい旅でありました。

「飛び込んでみたらそこに人がいた。」

飛び込んでみたらそこに文化があった。」

私達の旅は、長い期間の調査、研究と言う大袈裟なものではない。オットーさんとシェリルさん一人のコンサートを山崎でお世話した時、たまたま私の所に遊びに来て、まだ挙式していない二人が「ここで結婚式をしてもらおう。」と思った事から始ましたのです。昨年の五月、挙式をしたいが可能だろうかとの問い合わせに、これこそ前代未聞の大行事と、私は受取り、山崎昭和会の皆さん、山崎町民合唱団、仏教婦人会と話が大きくなり、皆さんの賛同の中に準備はすすみ、すばらしい合唱の中で式典は盛大厳肅に進行しました。

これに驚き又喜んだ一人がそのお礼にと、本年六月、スウェーデン夏至祭りの合唱フェスティバルに招待してくれたという次第です。

鶯鳥がこんな大きな羽根を抜いてくれましたが、こちらの合唱団の実力の程は、海壁にあたります。又現地コンサートの実情も、現地のホテル、交通等は旅行社も不案内。この様な難問の中で中々決断が出来ない。

然し又別の情報では、かなり有名なアマチュア合唱団でも海外旅行となると全額自費、歌わせて下さい式の公演がほとんどで、酷い話になると、コンサートという事で行って見たら教会の階段で歌わせられて、通行人からナゲ錢があつたとか…。それと異なり私達はプロデューサーから正式出演依頼が届き、宿泊、食費、少々ながら指揮者へのギャラも明示されてのプロ扱いの招待に、これは何としてでも参加しなければとの決断に達しました。

其後半年間特訓又特訓という苦労もありましたが、合唱内容も良くなりよいよ出発となります。

白夜と言つ北欧の短い夏の夜に現地着、領主様の館であった童話の舞台の様なホテルに入ります。そこに王様の様な白い髭のオットーさん、王妃の様なシェリルさん、が現れ再会の喜びと歓迎の気持ちを身体いっぱいに表現します。又プロデューサーのラグナーさんも来て、気取らない歓迎の言葉と打合せ、日本流の形式ばつたそれとは異なり、親近感あふれるものでした。早速イベントが始まります。まず出演団体のパレードです。中央広場の中央に日の丸が上がりります。見物人から日本からの出演と知つてか暖かい声援と拍手が飛んで来ます。これらの交流の中に本当の人間の美しいものを発見した思いです。

其後、私達の合唱の本番です。然し会場は山崎中学校の旧体育館並み、ピアノも名もない古いもの、イスはパイプである。これなら山崎の方が会場的にはすばらしい。然し入ってくる聴衆が音を楽しもうとするムードを持った人達が集まって来て会場を盛り上げる。これらの人達は、ステージで歌う前から、自分達でテーマソングを合唱します。あたたかい拍手で迎え、お座なりでない本当のアンコールを送ってくれる。気がついて見ると、私達のホテルだって、町のたたずまいだって気取ったこれでもか、これでもかというおしつけがない。教会が、学校が、民家の小屋までが自然とマッチしてすべて画になる。スウェーデンの文化は、神と自然と人間が長い歴史の中で創り上げたここだけにしかないものであった。私達はその文化と人の心の中にドップリ飛び込むことの出来たすばらしい旅がありました。

毛沢東の重陽の詩

山崎詩舞道連盟

小川

登

六盤山 古詩 去声西、一五、一六韻 平声一二韻

天高而雲淡
望断南飛雁

天高く 雲淡し
望断す 南に飛ぶ雁

非到長城好漢
屈指行程二万

長城に到らずんば、好漢に非ず
指屈れば行程二万（里）

六盤山上高峰
紅旗漫捲西風

六盤山上 高き峯
紅旗 漫まに 西風に捲く

今日長纓在手
何時住縛蒼龍

今日長き纓は手に在り
何れの時か 蒼龍を縛り住めん

人生易老天難老
歲歲重陽又重陽
戰地菊花分外香
一年一度秋風頸
不似春光尚勝光
寥廓江天万里霜

人の命老い易く天老い難し
さいさい ちようよう
いままた ちようよう
戦地の菊花 分外香わし
一年に一度秋風頸し
春の光に似ず

春の光に尚勝る

寥廓たる江天万里の霜

中国でも旧暦の九月九日を重陽の節句として「登高」と言って小高い所へ登ったり、菊の花を浸したお酒を飲んだりして家族の健康を祝うのである。日本でも菅原道真の九月十日の詩にも見られるように、平安の昔から重陽の節句を祝つて来たのである。日本でも中国でも秋は淋しいものとして語られ又、歌われて来た。王維の「九月九日山東の兄弟を憶う」、杜甫の「九日」など何れも悲哀と孤寂であるが。毛沢東の詩はみじんも寂しさ、悲しさは感じられない。

平成五年十一月二十日は、毛沢東生誕百周年であるから、この詩の作られた一九二九年は毛沢東三十六歳の時である。この頃、彼はマラリアに罹され、戦地では担架に乗って部下を指揮していたと言われる。それでもこの詩には病氣の匂いなどは全く無く、青年革命家らしい理想と自信に満ち、未来へのたぎるような情熱が感じられる。杜甫が「此れより聞く須い」と歌った重陽の菊の花を「分外香し」と歌い、杜甫が悲愁を言つた重陽の景色を「春の光に勝る」と歌い上げている。中国にも秋を悲しく画く悲愁詩想と言うものがあるが、毛沢東は逆に「頌秋詩想」の代表的な詩人である。一九七九年出版の「毛沢東詩選」には毛沢東の詩はそれ程多くはありませんが三十九首收められている。その内の十一首は秋を詠んだ詩である。毛沢東が長征をほぼ終えた一九三五年十月に詠んだ有名な「六盤山」の詩も秋を賞でた詩である。

毛沢東はこの「六盤山」でも、とかく悲哀、孤寂としてとらえられかちな秋の空、流れ行く雲、飛ぶ雁などを前途、未来、理想への熱情、確信と結びつけて明るく、力強く詠っています。毛沢東は長征の出発地である南に去っていく雁の姿が、視界から消えて行くのを見守り、そこから赤軍の成し遂げた長征と言う壯举、そしてそのあとに控えているさらに大きな事業を豪放、快闊な気迫で謳いあけているのであります。毛主席は六十才を過ぎてから英語を習い、湖南なまりは抜けなかったものの立派にマスターしたと言われています。

又、宗教にも興味を持ち、特に禅宗が好きであった。金剛經・六祖擅經・華嚴經を読み、經典の解説書などを読んだが、とくに禅宗の第六祖惠能が好きで、其の弟子の編纂した、六祖擅經は空んじる程愛読したと言われている。更に、もう一人、鑑真和尚が好きで、五回も日本に渡ろうとして失敗し、最後に失明の痛手まで受け乍ら、六回目の航海でついに志を遂げ、日本に佛教と中国文化を広めた和上を尊敬し、賞賛して、止まないと申されていた。

竹のカーテンと言う言葉がある。中国人は日本のことを大変よく見て研究しているが、日本人は現代中国をよく知らない。日本人的中国觀からすれば、毛沢東が英語を話したり、神宗に興味を持ち、経文を読んだ等と言うことは想像が出来ない話である。

スクイム市『寸景』

新潮会 長川耕一

第二次山崎町国際親善交流調査団に、山崎文化協会から参加。その寸景を：

I "ハロウィーン" (魔除け祭)



スクイム市へ向かう車窓に、住宅・店舗などの、ドアや窓に、骸骨・蜘蛛などいろいろな「お化け」を切り抜いて張つてあるのが目につく。なんだろ? うな? と、話しているうちに到着。翌日学校を訪問、車窓から見た、お化けさんのお出迎えを受ける。

どの教室にも色とりどりの作品を、天井や壁面に張り巡らしている。また大南瓜に目鼻をくり抜いた可愛いお化けも。この行事は、アメリカの子供たちが、クリスマスの次に、楽しみにしており、十月上旬に飾り、十月三十一日が来ると、思い思ひのお化けの姿をして、「何かくれなきやいたずらするぞ」と言って近所

の家の玄関を叩き、チョコレートやキャンデーなどをもらい歩くそうです。

II "盆栽家 ビル・シンプソン"



施設見学、意見交換後、「シンプソン」さんから、盆栽を観に来てくださいと、お誘いを受け、田口助役、藤村清一さん、香山副課長とお伺いしました。年数が浅いと、お化けの姿をして、「何かくれなきやいたずらするぞ」と言って近所

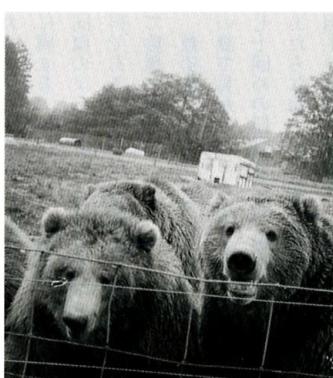
れており感心いたしました。
現在約百人余の会員があり月一回、講師（日本・中国・米国人）を招き研究会を開いているとのことです。

敷地内を流れる灌漑用水路を利用して、太鼓橋・石像・灯籠等を振った、日本調の小庭園。コレクションとして、珍らしい「小石類」を収集、室内、屋外に展示されておりました。わずか三〇分程度でした

が、楽しませていただき惜別。
盆栽を通じよりよい交流の一環ができることを念願するものであります。

III "自然の村" スクイム
山崎文化協会から
間余、オリエンピック国立公園、ハリケーン屋根へ。原生林をはじめとする雄大な景色を眺望させていただきました。

スクイム市へ記念品として
田内龍陽さんの作品、二点 陶磁器
「自然釉壺」書「和心」を、交流記念に寄贈させていただきました。



丘陵地帯の拡がる、ゆったりした、スクイム。木々に囲まれた住宅、色彩豊かな屋根、そのほとんどが平屋建。
いまも多くの退職者（高額年金生活者が定住されていると聞きますが、永住するに相応しい、市として、注目されてい

水墨画に寄せて

山崎町美術協会副会長

横江敏夫

たしか昭和四〇年代前半と記憶している。山崎町に美術協会があつて、その展覧会が開催されると知ったので神戸在住の私は山崎出身でもあり懐かしくもあってその年の美術展に出品した。ほどなく入賞通知が来て授与式に出席することになった。どこかの庭の芝生の上で参列者と一緒に賞状と賞品を頂戴した。

「あなたの作品は日本画とは、いい難いが良く描けていたので入賞した」と役員の話を耳聴して神戸に帰った。その頃日展系では展覧会場の効果を狙って厚塗りが流行していたので「南画、水墨画、文人画」が理解できなかつたのかも知れない。そんなことを思い出しながら今は山崎美協の一員として仲間入りしているので多くない紙面であるが水墨画の考え方を述べてみたい。日本画の基本は水墨であり物と心とによって構成されるのが東洋の画である。東洋の心といふのは、物より心を優先した考え方をもつてゐると思う。「物象より心象」水墨画は色をオニ義的にした心象画であるから絵具を

使用することがある、それは墨を主体にして色をそこに補うという画法である。墨の濃淡が音楽の音の高低やハーモニーのように色がなくても情感を出し得るのであり、私は水墨を造形音楽だと思っている。点と線と濃淡の構成であり絵の具を添えるのは、絵の具で画くのではなく、墨画に絵具を補色として使用することによって、ある程度の効果を期待するものである。東洋画は格調を尊ぶ。それは人間性陶冶の理想であるから色で品格を失つては東洋画としての存在価値はない。水墨画は強く格調が高いから、それ故に東洋の画の本質といえる。だからと言つても、水墨画を画人の心性いかんによつて必ずし派に、できあがることは決まらない。描く人の技と心の修練の末、一歩一歩向上するもので「歩々是道場」という禅の言葉も考へさせられるのである。水墨画の本質は「写意」であるので、生物の形と心を、もとに写しとるのが写生であり、写生が機械的に正確だというだけでは、物の世界での見方であつて、決して物心一如にはならないのである。

生命の本質にふれるという意味では写生がある、心が失われつゝある今日、物をさせる日々である。

センリョウは、早春の山草ヒトリシズカやフタリシズカの仲間でセンリョウ科に属する。マンリョウは名前や形態から同属のように思われるがちだがヤブコウジ科である。ともにお正月の縁起植物として珍重される。

数年前、センリョウを山崎の八幡神社の森で見かけたことがあるので、先日、七十回めの観察会の時、探してみたが見あたらなかつた。初冬の龍野の鶏籠山や相生の生島では落葉した雜木林に自生したセンリョウの実が真っ赤に映える。センリョウは強い光や強い風のところを嫌つて、高木の下や南向きの海岸の林床を好みます。また、殺風景な冬の庭をカバーするのにセンリョウは重宝がられるが、この辺りでは冬の管理が難しい。園芸品種もたくさんある。実が黄熟するキノミノセンリョウもその一つ。また中国南部原産のチャランもこの種類で鑑賞用として栽培されている。

マンリョウも庭には欠かせない日本の伝統園芸植物となつてゐるが、竹藪の縁

センリョウと マンリョウ

植物同好会幹事

井口武一

や森や林の木もれ日の降る辺りに自生しているのもいいもので晚秋の冬枯れした林を行く時、この透き通るような赤い実を見つけるとほつとする。その名の通り黄熟するキミノマンリョウ（黄実の万両）、白く熟するシロミノマンリョウは園芸種で日本特産野生種を改良したもので外国でも喜ばれるという。

古来、日本ではセンリョウ（千両）マニリョウ（万両）は名前とともに喜ばれ、カラタチバナを百両、ヤブコウジを十両と植打ちづけ、いすれもお正月の吉祥とされてきた。もうすぐお正月。シダやユズリハ、ダイダイなどお正月にまつわる植物と民俗との関わりを尋ねたり、植物の名の由来を聞いたりするのも同好会の楽しみのひとつである。

今年度も植物同好会（会員約百名）定例の観察会として、完熟の四季折々の山野や鎮守の森を土曜の午後や日曜日に（四月から十一月まで八回と一月の総会を含めて九回）訪れた。

来年度は一月に山崎文化会館研修室で総会を開催する。そこでは平成六年度の計画を話し合い、有名な講師を招聘して講演を耳聴する予定にしている。

八幡神社新能は、今年で第八回目を迎え、幸い好天に恵まれ、境内に溢れんばかりの観衆を集め、無事盛大に奉納することが出来ましたことを嬉しく思います。今回を重ねる毎に、地域の皆様方の、能樂に対する理解と関心が深まり、開催の前日には、遠く県外や姫路市を始め、隣接市町からの問い合わせが殺到する有様で、山崎八幡神社新能が、地域に根付き、定着しつつあることを、ほんとうに嬉しく思います。

当地の薪能は、ご承知の通り、会場の周囲をうつ

そうとした樹木に囲まれた、莊重な神苑で行われますだけに、その趣も、

一しおのものがあり、野外公演でなければ、味わう事の出来ない素晴らしさがあります。

薪能奉納を終えて

山崎八幡神社薪能奉納会

石敏郎

で、ただ一回（第四回目）のみ、台風のため、会場を移した思い出がございますが、その他はお陰様で總て天候に恵まれました。

これも偏に、八幡神社の御神徳と、加

えて、奉納会や宍粟郡謡曲同好会の皆様

方の、献身的な御奉仕と、薪能の成功におよせ下さる祈りの心が、神に通じたものと、有難く感謝しております。

また、山崎八幡神社の能舞台は、元禄十二年（西暦一六九九年）創建されたものと伺っております。舞台正面の鏡板に描かれた松の繪が、普段は白くウツラとしか見えないのに、暗闇の中に、炎えさかる明かりに照らし出されると、青磁色に輝き、クリクリと浮き出す様は、さすが三百年に近い風雪を、堪えぬ

いた、年輪の尊さを伺がわせ、山崎町が、他に誇れる立派な文化遺産であります。先人の残して下さった、この立派な遺産を、この後、大切に保存し、末永く受け継いで、薪能奉納を通じ、山崎町の文化の高揚に努めたいものです。

結成十五年を ふりかえって

さつき民踊グループ

大谷 つるえ

月並の言葉ですが、光陰矢の如しで私共、グループを結成して早くも十五年の歳月が流れました。最初は運動不足の解消

にと始めた踊りも日を重ねるに従い、今盛んに呼ばれている国民総ボランティア

の意を汲み、趣味を生かして、婦人会活動、町の行事等地域に密着したボランティア活動を続けてきました。文化協会の芸能祭に参加、五月には天然記念物、千年

藤の下で奉納舞をさせて頂き、八月は盆

おどり保存会にも加わり、九月は敬老会

の演芸慰問、十一月のふれあい文化祭に

参加、傍ら、まどか園、長水園、白寿園、

むつみ園の慰問、まだ他に種々会合のア

トラクション」と充実したボランティア

活動を続けております。その間、順風満

く行うは難しの言葉通り継続する事は、

中々、困難でよくもこまで続いたと思

う今日この頃ですが、思いおこせば楽し

い思出も沢山写真やビデオと共に残って

おります。今までに一番感激の深い思出

は始めて舞台に立って踊った時と平成元

年一月宍粟民踊同好会として十周年記念

に新装なった文化会館での合同発表会です。あんな立派な舞台に立つのは始めてで感激に胸轟かせ一宮町最北端富士野から朝の七時に出て来る張切よう、七〇人余りの会員みんなが燃えておりました。

八時に特別にお願いして、会館を開けて頂き、楽屋裏では、てんやわんやの大騒ぎ、みんな日頃しない厚化粧や日もさめるような踊り衣装を着飾ってはしゃぐ姿は、まるで花にたわむれる蝶のようでした。

ゲストにキングレコードの土井弘一郎さんを招き来賓には山崎町長始め、一宮町長、県会議員、社会福祉関係の方々がご来場下さり、八百個入れたお茶パックが足りなく、三階は勿論通路も通る余地もない程度で観客を袖から覗いて次から次へ伝令して、大喜びをしたあの感激は今も脳裏に焼きついて離れません。あれからはや五年、会員も老いてやめる方や他の教室にいく方も出来ましたが、若い方達に入会して頂き、その上、末頼もししい小學生の西川真衣ちゃん、早紀ちゃん姉妹と丸山紗知ちゃん、知絵ちゃん姉妹らが加って、若くて美人の先生を迎えてのお稽古は水を得た魚の様に明るく楽しく私たちのマスコット的存在として、楽しくグループ活動を続けております。今後共体力の続く限り、若さを保つ良薬として舞踊を続けていきたいと思っております。

三ツ山大祭に出演

山崎郷土芸能保存会

大谷司郎

*宇原獅子舞と都多獅子舞共演

姫路市にある播磨国総社神社(射楯兵主神社)では、二〇年に一回の大イベン

トである「三ツ山大祭」が平成五年三月三一日から八日間にわたって行われま

した。四日目になる四月三日、大手前公園の特設ステージで「神楽三昧PART II」のプログラムに山崎町の宇原と都多の獅子舞が出演をしました。

祭全体としては一般的には神事色よりも市民の祭のようで多彩なプログラムが多くあったようです。

この神楽三昧PART IIでは、午後一時から都多獅子舞が始まり、四時半ごろ宇原の梯子獅子で締めくくるまでたっぷりと時間をいただき、獅子舞を披露させていただきました。また、その後は有名な石見の国の高千穂夜神楽が披露されました。主催者である総社神社と神戸新聞事業部が事前の打合せで全国レベルの神事芸能と西播磨の郷土芸能をミックスしたプログラムを開催したいといわれていたことが文字通り実現した訳です。なぜ山崎町に白羽の矢を、と聞きますと昨年

獅子舞フェスティバルを実現した町として郷土芸能に力をいれていると知つたといわれました。

出演時刻の前に獅子が神社にお参りをする「宮入」をしたとき警備の人たちに人垣をかき分けてもらい、笛太鼓に合わせて獅子を進めていき、境内に入ったときの壮快さは忘れられません。神社の前には三つの「置き山」が設置され祭のシンボルとなっていました。

宇原の獅子は町内では唯一の毛獅子で梯子獅子もある勇壮なもので、たぶん瀬戸内の伝播経路があると思われます。同じ町でも北部になる都多の獅子はゆったりとした舞で山陰系の獅子といわれています。伝播経路から山陽と山陰両文化が

抱えつつも、大きな舞台を与えられたことに感謝して、これを足掛かりに今後も頑張りたいものです。

交差する接点としてこの地域の特性を見ることができます。

郷土意識が薄れていきつある今日、

郷土芸能を守り継承して行くことはたいへん困難なことです。後継者づくりや技の専門性を高めることなど多くの課題を抱えつつも、大きな舞台を与えられたことに感謝して、これを足掛かりに今後も頑張りたいものです。

第十五回春の芸能祭ご案内

日 時 平成六年五月十五日(日)

午前十時から

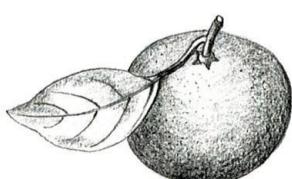
午後三時まで

会員の日頃の練習の成果を、ぜひご覧くださいますよう、
ご案内申しあげます。

後 援 神戸新聞社・山崎町教育委員会
場 所 サンホールやまさき(山崎文化会館)
主 催 山崎文化協会

参加部門 山崎詩舞道連盟
山崎謡曲同好会

山崎郷土芸能保存会
山崎邦楽邦舞研究会
さつき民踊グループ
(芸能祭実行委員会)



さつきから蘭に浮気している、と悪友達から陰口をたたかれながら、蘭づくりの楽しさに、ひたつているこの頃です。

愛蘭家は愛り者が多いという。所詮は草でしかない植物を人間以上に愛している人達というのは、世間一般から見れば変っていると言わざるを得ないだろう。しかしこの蘭づくりの楽しさというの

は、自分で植え込んで水

をかけ蘭を育てないと判らないもので、普及するためには蘭を見てもらうのが何よりのきっかけであるが、美しさは判つても楽しさまでは判りません。

春を過ぎる頃には、一鉢ずつ新芽の出具合を確かめてみる。ほぼ出るべきところに元気な芽が砂を切っているものには、口元がほころんでしょう。

この新芽を見る愉しさこそは、他の何物にもない蘭づくりならではのたのしみだらうと思います。上砂をはじくって芽を見ることは出芽を傷つけることになるので絶対に見ないと言う人がおりますが蘭作りの楽しさ、面白さを自ら放棄してしまうようで、またまた鉢を手に取りあげてしまうのです。まあこの時期蘭づくり

りする者にとっては、蘭はこの世の何物にも勝るもので、一目眺めただけで心のわだかまりなど溶け消えてしまいます。

いまわが家では、あの細長い濃緑色の葉の中から細い花茎が抜きん出て端麗と言える寒蘭の花が、そこはかとない香りを漂わせています。色調は洋蘭にくべて派手でなく、可憐清楚そのもので心惹かれるところです。

寒蘭展も各地で開かれています。花の美しさ柄の良さが競われるのですが、花や柄の美しさだけではなくて、葉姿の美しさも総合されて鑑賞されるようです。花色という栽培技術を補って余りある葉姿の美を見落としてしまったのは、東洋蘭としての美しさも深さのない単純なものになってしまふからでしょうか。春蘭や寒蘭が格調高い古典園芸として愛好される一因に、この葉姿の高貴さが取り上げられており、野生蘭やらされません。東洋蘭のこの葉姿は一年草でなく、三年四年と丹精を重ねた葉姿の美しさあります。このことが一年草の山野草と異なり伝統園芸と呼ばれる東洋蘭の良さだと思います。

東洋蘭

に思つこと

播磨さつき会

長田一三

例会講話より

人間の人格構造

昭和会上嘉宏

今年もはや暮れようとしている。毎月

の例会での勉強会も、各層の方々の有意義な講話を聞いたり、今更と思われるかも知れないが、京都方面へ見学旅行にも出かけ、平家寺等普通の観光コースにはない古寺をも訪ね、古都文化の底の深さをあらためて知らされる想いもした。

ここでは、七月例会に本條会員のお話を聞く機会を得たので、その概要を御紹介したい。

人間の性格にはUタイプとGタイプがある。簡潔にいうとUタイプは開放的・ラフ型で、典型的なアメリカ人に多いタイプである。Gタイプとは階級性が強く、ドイツ人型といえる。両者の間に怒りなどの情緒的反応に多少の違いがある。例えばドイツ人の方がすぐにムーットする傾向があるとかいわれる。また、実用主義と理想主義の違いについては、

いる。政治の世界でもアメリカは二大政党に対し、ドイツは小党分立であつたりする。ドイツ人は三人集まると四つのグループが出来るともいわれている。

われわれ日本人はどうか！一般的には、よく言われるように、戦前派・高令者・郡部はGタイプ。戦後派・若者・都市派はUタイプが多いといわれている。

人間の頭の中には、中枢領域といつてGタイプの人格にはUタイプの人格が入り込める領域があり、反対にGタイプの人格にもそれと同じようなことがいえる。この領域の壁は自分の性格を守り、あらわす壁もある。壁があまりにも硬いと自我の単純化につながり、その緊張が一舉に外に出ることが怒りにつながりもするのである。

最後に感想めいたことを付け加えさせていただくなれば、われわれは多様な経験をつみ重ねていくことによって、壁をやわらげ、単純化をほぐし、人格をみがき上げていくことに心掛けなければならないと思う。それが「ゆとりのある心の豊かさ」にも通ずる道ではないかと思う。

(十一月三十日 記)



史跡「鹿沢城本丸跡」の石碑について

山崎郷土研究会

岸本正理

立派な穴佐和城を築きました。一六四〇年のことです。

日本史年表に照らして見ると三代将軍のことです。

家光の時代で鎌国体制が完成した頃です。

次に鹿沢城の城主となつたのが岡山藩

池田光政の弟の池田恒元で三万石を賜りました。

三代続くわけですが、いずれも早逝して

います。

その頃の將軍は、家光について四代將

軍家綱と続き、日本の大きな出来事として、由井正雪の乱があげられます。

次の本多忠英は、大和郡山から移封され一万九二四石が与えられました。

本多氏は、忠英、忠居、忠敬、忠鄰と八代続くわけ

ですが、この時代に宍粟の人々は、中央

沼沢の本丸跡であることを知る人は少なく、殆ど忘れ去られようとしています。

山崎郷土研究会では、このことを憂いここに石碑を建立して末代までも語り継ぎたいと願い、町当局の全面的なバックアップを得て、去る十月十三日に高さ約四メートルの巨石を打ち立て、除幕式を行いました。

この石碑の背面に歴代藩主の年代が刻まれています。

池田輝澄は、宍粟郡領主として山崎に城下町の町造りを始めた殿様です。祖母は、家康の側室だったので家康の孫にあたるわけです。

この殿様が山崎へ三万五千石（後に佐用二万五千石が加わって六万三千石）を与えられ入封した一六一五年は、大阪夏の陣がおこり豊臣氏が滅亡した年であります。

次の松井康映は、山崎藩お家騒動の後をうけ岸和田より移封されて五万石級の



山崎茶道研修会で学んだ事

山崎茶道研修会

石丸和子

山崎茶道研修会も二十数年が過ぎ、私もそれと一緒に育ってきました。

その中で、学んだことは沢山あります。

「道・学」について、故庄静夫前会長や講師の柴山禪雄師・又神山宗明先生のお話が大へん勉強になりました。その中でも印象深かった柴山禪雄師「日々是好日」のご講話をなさる為に、ある施設をご訪問された時のお話で、「時・処・位」という言葉を聞きました。与えられた時・処・立場をどう生きていかかという事で

の政治的変動に無関心のまま惰性的な生活を続けていたと思われます。中央の将军は、綱吉や吉宗、家斉、家定、慶喜等それぞれの時代に赤穂浪士の討入りやペリーの来航や安政の大獄等々大事件がいろいろと起こっています。

以上、石碑の裏面の歴代藩主の時代と天下の動きを極めて大ざっぱに眺め、どのような時代に山崎藩の人々が生きていたのかを見てみました。

ご講話下さる諸先生方は、何日も前から、又夜遅く迄勉強され、私達会員にわかりやすくお話し下さいますが、そのご苦労のお蔭で、沢山の知識を得る事が出来たのは、大変うれしい事です。

これらの教えを忘れず、日々のお稽古に生かし、より一層、道の修業に励み、研修会活動も充実したものになるように会員の皆様と頑張りたいと思っております。



勤めをやめて、唯何となく日々を送っていた私が、こんな無意味な毎日では自分を見失ってしまう、と気が付き、連れ行ってもらった所が、今の春陽会の先生のお家でした。あれからもう何年の年月が過ぎたことでしょう。今では、週二回の稽古日が待遠しい程、私にとって心のさえとなつております。

稽古日になると、おきまりのようにお茶をいただき、家でのおさらいのこと、稽古後の足の痛さなど、いろいろと話をしながら準備を致します。私達のそんな話を静かに聞いておられる先生の姿に、ふと、舞踊の年輪のようなものを感じるのでござります。

ところが、いざ稽古となると、先生の様子は坂東寿賀春という師匠に一変、きびしい稽古が始まります。

一つのごまかしも、手ぬきも見逃さない

舞踊の稽古によせて

山崎邦楽邦舞研究会 井口定子

勤めをやめて、唯何となく日々を送っていた私が、こんな無意味な毎日では自分を見失ってしまう、と気が付き、連れ行ってもらった所が、今の春陽会の先生のお家でした。あれからもう何年の年月が過ぎたことでしょう。今では、週二回の稽古日が待遠しい程、私にとって心のさえとなつております。

稽古日になると、おきまりのようにお茶をいただき、家でのおさらいのこと、稽古後の足の痛さなど、いろいろと話をしながら準備を致します。私達のそんな話を静かに聞いておられる先生の姿に、ふと、舞踊の年輪のようなものを感じるのでござります。

い師匠の目、きびしい注意が二度三度。そのうちに、自分からあわてて足先をおしたり、目のやり場に気をつけたり…。牛の歩みではございますが、こうして一步一步はげんでおります。お稽古が終わったあと、誰の口からも、「あーむずかしいなあ。」の連発です。

そうです。むずかしいからこそ魅力があるのです。このきびしさの中に身を置くことで、自分の気持ちがしゃきっとし、一日でも若く元氣でいようという、勇気がわいて来るのでございます。

このように、心に張りを持って毎日を送ることができますのも、この春陽会に入れていただいたお蔭と思って感謝しております。親しいお友達もでき、いろんな方々とのおつき合いもさせて戴き、明るい毎日でございます。

足の筋肉が痛くても、週二回のお稽古日が待遠しい私達、お稽古もさることながら、親しいみんなに合えるということも大きな楽しみでもあるのです。

「足が痛い！」と大げさに言いながらも、稽古が始まると足の痛さは不思議にどこかへ飛んでしまいます。やはり舞踊が大好きな者の集いなのですね。

やさしく、そしてきびしい師匠の元でやかな心を育てようと、きびしく楽しい稽古をつづけております。

平成会結成5周年を迎えて

平成会 会長 石野哲男

地域文化の発展に少しでも寄与したいお互いの友情を深め品性を高めようとい

う目的で結成された「平成会」も早や五周年を迎えた。十一月十四日には、五周年を記念し、式典とともに関学グリーグラブを山崎文化会館に招き「チャリティー記念コンサート」を開催しました。

会員全員が一丸となって、今年の初めからその準備に取り組みました。主催者を入れていただいたお蔭と思って感謝しております。親しいお友達もでき、いろんな方々とのおつき合いもさせて戴き、明るい毎日でございます。

足の筋肉が痛くても、週二回のお稽古日が待遠しい私達、お稽古もさることながら、親しいみんなに合えるということ

も大きな楽しみでもあるのです。

「足が痛い！」と大げさに言いながらも、稽古が始まると足の痛さは不思議にどこかへ飛んでしまいます。やはり舞踊が大好きな者の集いなのですね。

やさしく、そしてきびしい師匠の元でやかな心を育てようと、きびしく楽しい稽古をつづけております。

る記念イベントだったと思います。

「平成会」は平成元年に、私達の大先生である「新潮会」の皆さんに祝福され激励を受け、前途洋々の気持ちで発会しました。が当初の二年ぐらは暗中模索戸惑いの状態で、会の継続すら心配する時期もありました。だが年を経るごとに

この会に賛同してくれる人も増え、会の基盤も固まり、活動も活発化していくままで、綿密な計画を立て進めました。月一回の例会は、それぞれの班が工夫を凝らし、時節、季節に応じた内容で研鑽、親睦を計っています。

作家の司馬遼太郎氏は、サンケイ新聞の「風塵抄」の中で「人間は高度に生きるのがいいにきまっている。生涯七、八年」という物理的時間の密度も質も、高

い努力が実り、あの大ホールをほぼ、満員の観客で埋めることができ、大盛況の結果、実行委員長を中心とした会員の努力が実り、あの大ホールをほぼ、満員の観客で埋めることができ、大盛況のうちに幕を閉じることができました。一世紀になろうという伝統と、国内外に高い評価を受けてきた関学グリークラブの方々の心に響きわたり、多くの感動を与えたと思います。又「平成会」にとつて

も、地域に大きくアピールできた意義あ

趣味

山崎用碁同好会

森林滋治郎

此棋は手見を禁ず

(この碁は待ったなしですよ)

エー、一席、お古いところでごきげんを伺います。

若いときから一生懸命に働いて財産を築いた旦那がいました。子供も大きくなりましたので、これに社長を譲り、本人は裏の座敷へ隠居いたしました。町内にもう一人、似たような、いいご身分の旦那がいました。

この二人の楽しみが碁でございました。夜が明けると、もうソワソワ。朝めしをカッこむが早いか、「ちょっと出かけてくるよ」と表に出ます。前の日に負けた方が出張することに決まっています。こりや定石ですな。碁を打てるのは町内でこの二人だけ、しかも都合の良いことに、二人は全くいい勝負でございました。黒を持った方がたいてい勝ちます。

ある日のこと、一方の旦那が続けて負けました。まつ赤になつて三番目を打つところが、どうしたことか大石が死んでしまいました。「たのむ、一手だけ待つ

てくれ」と申し込みましたが、相手はウソと言いません。待ってくれ、待たぬと

最初のうちは口争いでしたが、そのうちに一人は実力行使で碁石をハガそうとする、一方はその手を抑えつけるで、えらい喧嘩になりました。

あ

げくの果てに、黑白の石を突き崩し

て、「おのれ、死のれ」(お前なんか死

んでしまえ)とののしり合い、今後は一

生、お前とは碁を打たぬと一方が言えば、

いかにも、お前は出入り禁止してくれ

るわ、と仲たがいをしました。

そうこうするうちに、陽も西に傾きま

くるよ」と表に出ます。前の日に負けた

方が出張することに決まっています。こ

りや定石ですな。碁を打てるのは町内で

この二人だけ、しかも都合の良いことに、

二人は全くいい勝負でございました。黒

を持った方がたいてい勝ちます。

さて翌朝、同じ町内のことですから、

何の用事をするのにも相手の門の前を通

ります。最初のうちはたがいに相手を無

視していましたが、とうとうたまらなく

なつて一方が言いました。
「フン、いい年寄りが朝っぱらからフラフらしおって、碁でも打ちたそな面をしていやがる」
一方の旦那、ソロリソロリと牛の歩みの如く門の前を行き過ぎるところでした。が、シメタとばかりに立ち止まりまして、
「打ちたいが、お前さんをかまつていてる
てくれ」と申し込みましたが、相手はウソと言いません。待ってくれ、待たぬと最初のうちは口争いでしたが、そのうちに一人は実力行使で碁石をハガそうとする、一方はその手を抑えつけるで、えらい喧嘩になりました。

あげくの果てに、黑白の石を突き崩して、「おのれ、死のれ」(お前なんか死んでしまえ)とののしり合い、今後は一生、お前とは碁を打たぬと一方が言えば、いかにも、お前は出入り禁止してくれるわ、と仲たがいをしました。

あ、一番打って見やがれ」と、奇妙きて

来やがれ、お慈悲で打ってやらんでもないわい」

「慈悲だろうが仇だろうが、さあ、さ

あ、一番打って見やがれ」と、奇妙きて

れつな仲直りのうちに、また昨日のよう

に碁が始まつたということです。

「慈悲だろうが仇だろうが、さあ、さ

あ、一番打って見やがれ」と、奇妙きて

れつな仲直りのうちに、また昨日のよう

に碁が始まつたということです。

この話は、露の五郎兵衛という、江戸

で高名な咄家が得意とする出しものの一

つ。

碁敵は憎さも憎し なつかしし

とは、これ このことでございましょ

うか。

この話は、露の五郎兵衛という、江戸

で高名な咄家が得意とする出しものの一

つ。

碁敵は憎さも憎し なつかしし

とは、これ このことでございましょ

うか。

高令化社会の到来、健康で長生き、これは誰しもの願い。

いかにして、年をとるかを知ることは知恵のうち最大の仕事。生きるという技術の中で最も難しい章である――

スイスの(金言)

日本は豊かになったと言われている。

しかし、それはお金で買える範囲内のこ

とで逆にお金を積んでも買えない豊かさ

にはまだ手が届いていない。激動の時代

に青春を翻弄されたこの時代の人たちには、「これからが遊びや趣味の開発時代」

といえるのではないだろうか。

その点、碁は時間的、空間的、対

人的、経済的、頭脳的云々と考えてみて

も若い時からの積み重ねが必要で、シリ

バになってから「さあ、趣味」といっ

ても、皿にのつてやって来て自分の身に

つくものでない。「よくも、碁を覚えて

いたことや」と仲間と談笑出来るのも、

まさに実感がこもる。

碁に限らず自分の性に会つた趣味教

養を、できるだけ早くから身につけてお

きたいものである。

高令化社会に備えるのは、年金や医療

といった福祉面だけではない。

また、「碁打ちは親の死目に会えぬ」、ともいわれてきた。親の危篤の知らせに、
「そうか、親が死んだか」……と、碁を打ち続けていた、……と
これらは碁の魅力を遺憾なく表したものでしよう。

ふれあい

山崎茶華道協会
谷川 善勝

平成五年は慶祝に明け、ウルグアイラ

ウンド等内政外交諸問題山積みのうちに暮れました。

私達の兵庫県は「こころ豊かな兵庫をめざして」芸術文化の華は各地に薫り、「ふれあいの祭典」が催され、山崎町では、西播のトップを切って、「ふれあいの祭典93兵庫県いけばな展」（西播磨会場）が計画されたのであります。

計画が採択されテーマパートに至る間の山崎町教育委員会のご努力、県並びに県いけばな協会の助成協力、当協会の全員参加、イベントに関わる組織が一体となつて目的達成のために取り組まれた姿を大切にしなければならないと思います。

「心・華・出会い」このテーマが見事に生かされた、いけばな展の成果を来場の方々から高く評価されたことはまことにうれしく存じました。

当日は県いけばな協会配車の観光バス数台に阪神・東播・其他遠方の多数の方々が早朝から来場され、地域の方々と

の交流、町と町とのふれあい、いけばなと人との出会い、華と心との語り合い、人ととの出会い、そしてふれあい。

来場の皆さんに対して一期一会の当協会の茶席、そこには素晴らしい心と心の交流の余韻を残して。物心両面で全力を傾注し、疲労の極にありながら明るく応対奉仕される当協会員の皆さん、本当にご苦労さまでした。

このたびの一大イベントは「心豊かな町づくり」の一役を十二分に果たしたもとのと確認しました。

とかく、文明の合理化を追求し、高度成長の過程に於いて二次的に考えられていたソフト面が新時代を迎える直面されました。

住み良い心豊かな町づくりのために会



来場者で賑わう会場

※萬葉御膳を味わう会

平成五年五月、山崎歌人協会と共に催。

姫路文学館で開かれた「萬葉一人と歴史特別企画展」の参観と「萬葉御膳を味わう会」を催しました。約三十人が参加。

文学館の学芸員の案内で展示品の解説を

聴きながら特別展を参観。このあと同館

内の望景亭和室で、古代の貴族らが饗宴の場で楽しんだ「萬葉御膳」を味わいました。好評だったので、今後は姫路市はじめ西播地域の文化施設の見学・研修の会を計画したいと思っております。

※山崎町の昔の絵地図を寄贈

平成五年六月、文化協会から山崎町へ

昔の同町中心部の絵地図と播磨・摂津の城跡など描いた表示板を寄贈しました。

絵地図は、今から約三五〇年前、松平周防守時代の山崎町中心部を描いた縦一m、横一・五mの地図。岡山大学に保管されているのを複製したもの。表示板は縦二m、横一・五m。タタミ一畳くらいの大

長を中心として協会員微力ながら努力する所存であります。

最後になりましたが、山崎町に芽ばえ、育ちつつある芸術文化が益々発展しますよう、町当局の一層のお力添えをお願い致します。

事務局便り

※スクイム市へ芸術作品を贈る

平成五年秋、山崎町と姉妹都市の締結

をしているアメリカ・ワシントン州・ス

クイム市へ国際交流訪問団が出向きました。

双方の市町の親善交流をすすめる具

体的な方法を調査研究するための訪問団

で、文化協会から長川耕二副会長と藤井

七代理事が参加して下さいました。お二

人には、スクイム市幹部との話し合いや

文化施設の見学など寸暇をおしんで活躍

していただきました。レセプション会場

では文化協会から田内龍陽先生の書・陶芸作品をエドワード・ベック市長に贈り、

大変喜ばれました。約一五〇人の参加

者に作品が披露されたときは大きな歓声がわきました。

※山崎秋のふれあい文化祭

平成五年十一月、山崎文化会館で開かれ、町内の二十団体、約三三〇人が出演

して、いろいろの演技を披露して下さいました。観客は延べ一千人を越える盛況でした。

山崎町文化協会新役員及び団体名

編集委員	浅田耕三 長川耕一 藤村清一 安井道夫 （アイウエオ順）	荒木俊介 北川泰子 町 悅子 和田秀男
監 顧	塙田清一 朱山毅 井口武一 西川慶子 杉本清美	小池忠雄 山崎茶道研究会 植物同好会 さつき民踊グループ 播磨さつき会
事 問	三浦昭平 垣口正信 藤村清一 河本雅視	安井道夫 尾崎正明 栗の実会 平成会 福山清一
事 務 局		高野保雄 新潮会 塙田清一 朱山毅 井口武一 西川慶子 杉本清美

編 集 後 記

編集長 荒木俊介

はじめに、今回、各団体からご寄稿頂いた方々に深甚なる感謝の言葉を申し上げたいと思います。有難うございました。

特に、藤井慧乘氏の「北欧の旅に思う」を読んで、民間人による素晴らしい国際交流に絶大な拍手を送ると同時に、我々にだって、やれば出来るんだという勇気を与えてくれます。藤井慧乘氏には重ねて厚く御礼申し上げます。本誌も回を重ねること十三度になりましたが、その間、先に、本誌創刊の編集長根岸元彦先生を亡くし、この度又、藤村省三先生を失うことになりました。年々歳々、花相似たり、年々歳々、人同じからずの感一人のものがあります、こゝに、謹んで先生のご冥福をお祈り申し上げます。

コラム欄には、上山安敏氏と堂元光氏お二人の玉稿を頂きました。両氏の今後の益々のご活躍をお祈りすると共に、誌上をかりて、厚く御礼申し上げます。

表紙並びにカットは、本号から黒敷豊子先生にお願いすることになりました。先生の絵は、隅々に迄神経の行き届いた線の妙味が獨特の素晴らしい境地を醸し出しています。ご活躍を楽しみにしています。二年間にわたって、ご協力頂いた柳田氏に厚くお礼を申し上げます。

OA機器・事務用品・スチール家具
学校設備品・理化学機器・楽器

イトーオフィスサービス 株式会社

(旧社名 伊藤文具)

代表取締役 伊藤 勉

山崎町中央商店街 TEL(0790)62-0126

創業明治28年・さつき本舗

四季の菓子

御進物・おみやげ・お茶うけに、四季折々の
真心こめた手づくりの御菓子を



御菓子司 さつき

本店：播州山崎町さつき通り (電)62-0170
山田店：播州山崎町山田 (電)62-0160



飛石機械産業からのお願い

人が人として幸せになれる処方箋は何なのか、そのようなことを考え「幸福の泉」を生活信条に、自作自演で30数年を歩いて参りました。昭和46年、会社発足時に経営理念と改め、お客様のご信頼にお答えする為に、人としての使命感に燃え、それを無限のエネルギーとして全社揚げて取組んでおります。

当社では、企業は社会の公器でなければと申し上げており、流通の世界の中で生活文化の向上を願い、多目的に活躍しておりますので、尚一層のご支援をお願い申し上げます。

TOKIISHI

飛石機械産業株式会社
TOKIISHI KIKAI SANSEI CO., LTD.
for happy day happy life
飛石機械 dept. ☎ (0790) 62-1790
トビイシHD dept. ☎ (0790) 62-3610
クリエイティブ dept. ☎ (0791) 63-4022
飛石レンタカー専門
飛石レンタカー専門
カーリース専門 ☎ (0790) 32-3411

◆最新型カラー現像機導入◆
カラープリント・スピード仕上げ
良い品を・安く・安心して買える店



Specialty Camera Shop
コアアカメラ

宍粟郡山崎町東鹿沢26-3 本店 TEL(0790) 62-2089
咲ランド店 TEL(0790) 63-0533

料理旅館・割烹

創業

文久元年

菊水

兵庫県宍粟郡山崎町山崎 287

TEL (0790) 62-1119代

幸

せへの旅立ちに――。

ふじむら貸衣裳

宍粟郡山崎町山崎181 本店 TEL(0790) 62-0052
咲ランド店 TEL(0790) 63-0565

地元にひろがる
心のふれあい

にししん



西兵庫信用金庫

理 事 長 菅 原 杓 夫

本
釀
造
龍
神

じ
り
た
て

ふるさとのお酒

清酒
山陽

確かな品質

純米酒

き
つ
一
献
き

サンヨウハイ



山陽盃酒造 TEL (0790) 62-1010(代)

原
酒

しほりたて



キリンビール
特 約 店

本 釀 造

兵庫県山崎町

老松酒造有限公司

安全で快適な生活をお届けする

共同石油株式会社特約店



株式会社 本條商店

社長 本條 衛

本社 兵庫県宍粟郡山崎町中井96 TEL (0790) 62-4321(代)